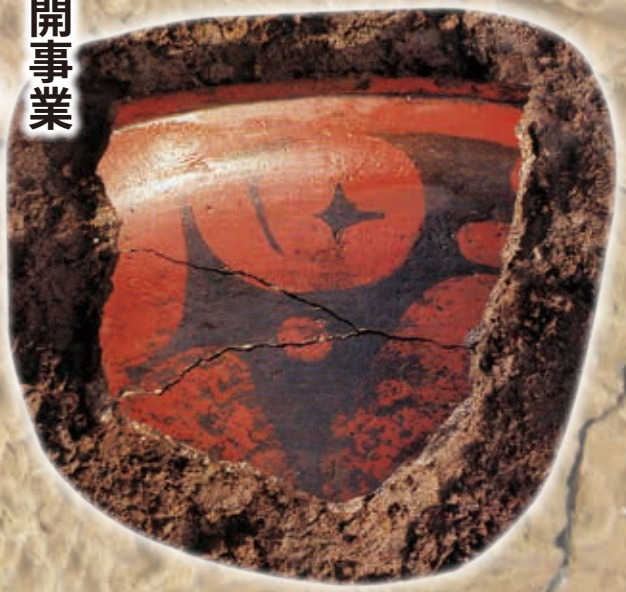
令和3年度出土遺物公開事業

らくがく縄文館

―縄文土器のマナビを楽しむ―



勝坂式土器
（柏市大松遺跡）
千葉県教育委員会所蔵



漆塗土器（銚子市粟島台遺跡）
銚子市教育委員会所蔵

市立市川歴史博物館
7月24日(土)～9月12日(日)

千葉県市川市堀之内2-27-1
☎047-373-6351

展示解説会：7月31日(土)・8月14日(土)・9月4日(土)
事前予約制：午前10時30分・午後2時　10名
申し込み：千葉県教育振興財団　☎043-424-4850

八千代市立郷土博物館
10月16日(土)～12月5日(日)

千葉県八千代市村上1170-2
☎047-484-9011

展示解説会：10月23日(土)・11月6日(土)・11月27日(土)
事前予約制：午前10時30分・午後2時　10名

袖ケ浦市郷土博物館
1月15日(土)～2月27日(日)

千葉県袖ケ浦市下新田1133
☎0438-63-0811

展示解説会：1月16日(日)・2月19日(土)
事前予約制：午前10時30分・午後2時　10名

講演会

「らくがく縄文館　―縄文土器のマナビを楽しむ―」

2022 1月22日(土)
会場 千葉県立中央博物館講堂
時間 午前10時30分～午後3時30分
（講演会の予約は別途ご案内いたします）

関連行事

講座

会場 市立市川歴史博物館
日時 8月29日(日)　午後1時30分～4時　〈30名〉

会場 八千代市立郷土博物館
日時 11月20日(土)　午後1時30分～4時　〈40名〉

会場 袖ケ浦市根形公民館
日時 2月5日(土)　午後1時30分～2時40分　〈50名〉

ワークショップ

「土器のペーパークラフトをつくろう」

会場 市立市川歴史博物館
日時 8月8日(日)・8月21日(土)　午前10時　〈15名〉

会場 八千代市立郷土博物館
日時 10月30日(土)・11月13日(土)　午前10時　〈15名〉

会場 袖ケ浦市郷土博物館
日時 1月29日(土)・2月13日(日)
午前10時・午後1時30分　〈12名〉

[主催]公益財団法人千葉県教育振興財団
[共催]市立市川考古博物館、八千代市立郷土博物館、袖ケ浦市郷土博物館
[後援]千葉県教育委員会、市川市教育委員会、八千代市教育委員会、袖ケ浦市教育委員会
[問い合わせ]公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター☎043-424-4850

※開催館によって、展示資料が異なる場合があります。
※今後の新型コロナウイルス感染症拡大の状況によっては、日程等の変更が生じる場合があります。
詳しくは当財団または開催館のホームページをご確認ください。
http://www.echiba.org/bunkazai_top.html（財団ＨＰ）

ごあいさつ

「縄文土器」は研究者のみならず広く一般にも人気の高い考古資料で、展示会も数多く開催されています。何故「縄文土器」は人々を魅了するのでしょうか。

「縄文土器」は日本列島で暮らした人々が初めて製作した土器であり、その当初から単に実用性のみを追求して製作された容器であったわけではなく、造形美も追求した器であったためと思われます。

その研究テーマは土器型式による時代の移り変わりや地域性、文化などの研究、製作技法の研究など考古学に関するものから、芸術的観点によるものなど多岐にわたり、数多くの「マナビ」を秘めています。

今回の展示では、このように多くの人々や研究者を魅了し続ける「縄文土器」に関わる「マナビ」の一端を紹介させていただくことによって、皆さんが「縄文土器」を楽しく学ぶきっかけを提供できるのであれば幸いです。

最後になりましたが、御協力をいただきました関係機関並びに関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

公益財団法人　千葉県教育振興財団

凡例

1．本図録は、令和３年度出遺物公開事業「らくがく縄文館」の展示解説図録です。
2．展示資料の所蔵先は、本図録の展示資料一覧のとおりです。
3．本展示は、文化財センター長 福田誠・調査第二課長 島立桂の指導のもと、主任上席文化財主事 上守秀明、文化財主事 服部智至・太田敬宏が担当し、上席文化財主事 栗田則久の協力を得ました。
4．図録の執筆・編集は、第２章(2)・第３章(7)を主任上席文化財主事 渡辺修一、コラム１を服部、コラム２を太田が行った他は、上守が担当しました。
5．展示資料一覧には、展示番号、資料名、遺跡名、所在県市町村名、資料所蔵先者を記載しました。
6．開催館によっては、展示資料一覧に記載した資料の一部が展示されていない場合もあります。
7．本書掲載の図版の提供や出典等については、巻末に記載しました。
8．本展示の企画・開催、資料借用ならびに本書の編集にあたり、多くの方々、教育委員会、博物館等をはじめとする関係諸機関の御指導、御協力を賜りました。ここに御芳名を記し、深く感謝の意を表します。

※本事業は、令和３年度国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金(「地域の特色ある埋蔵文化財活用」事業)の交付を受けて実施しています。

団体

旭市教育委員会、我孫子市教育委員会、市立市川考古博物館、市川市教育委員会、市立市川歴史博物館、市原市教育委員会、市原市埋蔵文化財調査センター、茨城町教育委員会、柏市教育委員会、香取市教育委員会、鎌ケ谷市教育委員会、鎌ケ谷市郷土資料館、木更津市教育委員会、君津市教育委員会、君津市立久留里城址資料館、佐倉市教育委員会、酒々井町教育委員会、芝山町教育委員会、渋川市教育委員会、袖ケ浦市教育委員会、袖ケ浦市郷土博物館、千葉県教育委員会、千葉県立中央博物館、千葉市教育委員会、千葉市立加曽利貝塚博物館、千葉市埋蔵文化財調査センター、銚子市教育委員会、東京大学総合研究博物館、東京都埋蔵文化財センター、富里市教育委員会、流山市教育委員会、成田市教育委員会、成田市下総歴史民俗資料館、南山大学人類学博物館、日本大学文理学部史学研究室、野田市教育委員会、野田市郷土博物館、東村山ふるさと歴史館、常陸大宮市教育委員会、船橋市教育委員会、船橋市飛ノ台史跡公園博物館、松戸市立博物館、明治大学博物館、山梨県立考古博物館、八千代市立郷土博物館、横芝光町教育委員会、四街道市教育委員会、早稲田大学會津八一記念博物館

個人

赤塚弘美、浅野健太、石渡典子、泉明里、井出稜、稲葉佳代子、井上賢、井原瑠梨、江藤隆博、大網信良、大内千年、大熊佐智子、太田国男、大竹弘高、大村裕、大森隆志、小川勝和、小倉和重、奥住淳、鬼澤昭夫、柏女弘道、粕谷馥夫、神野信、北澤滋、黒沢浩、後藤佳一、後野真弥、小林健二、齋藤匠、齋藤礼司郎、酒井弘志、桜井敦史、紫美春、島田和高、下岡宗大、白根義久、鈴木素行、清藤一順、髙橋優美、館祐樹、田邉由美子、谷川遼、谷口友季、千葉敏朗、塚本師也、辻史郎、手嶋秀吾、寺内博之、伝田郁夫、當眞紀子、戸村正己、中林香澄、西沢隆治、西野雅人、西原崇浩、西村広経、萩野谷悟、畑山智史、蜂屋孝之、浜田晋介、広瀬千絵、堀越正行、本多昭宏、松田富美子、松本勝、三石宏、道上文、道澤明、山口逸弘、山﨑慧、山路直充、山本孝文、吉田直哉、吉林昌寿、領塚正浩、渡辺新、渡辺修司、渡辺淑江

（以上、五十音順、敬称略）

はじめに

縄文土器は日本列島で暮らした人々が初めて製作した土器であり、その当初から単に容器として実用性のみを追求して製作されたわけではなく、1万年以上の歴史の中で多様な文様、器形など、意匠を凝らし造形美も追求した器であることから、多くの人々を魅了し続けています。

道具としての縄文土器については、土器のライフサイクルに関連して様々な研究テーマが存在します。時代の変遷の中で「縄文土器」は変化しますが、その変化の在り方は系統的に推移する場合が多いものの、時として急激な変化を見せたりする場合があります。そして、方言のように一定の範囲で地域性を有したり、時としてより広域な地域に広がったり、地域を越えて遠隔地の土器が運ばれたり、他地域の土器文様が別の地域の土器文様に反映される場合があったりと、その有様は実に多様です。それが故に縄文土器は年代的・地域的なまとまりによって年代観や地域性の指標となるとともに、集団関係・社会・交易などについて土器を通じてアプローチすることも可能であるため、土器を媒体とした研究テーマが数多く存在します。

今回の展示では五つの章に分け「縄文土器のマナビ」の一端を紹介し、千葉の縄文土器の魅力をお伝えしていきます。

第1章　縄文土器の美妙

私たちは、縄文土器の文様、器形、意匠、彩色などの美しさと妙なる技巧に感嘆し、その悠久の造形美に魅了されます。それぞれの美妙については実物を御覧になり、各々の感性で感じ取っていただければよいのですが、鑑賞の際の豆知識として少しだけ縄文土器のお話しをします。

(1)文様の美妙

「縄文土器」事始め　縄文土器は日本列島で初めて作られた土器で、1万年以上続いた縄文時代に使われた土器なので、そのように呼ばれています。明治10(1877)年、日本で初めて発掘調査が行われた東京都品川区大森貝塚から出土した土器の中に縄目文様のついた土器があることに、調査を主導したエドワルド・S・モースが注目しました。そして、明治12(1879)年に取りまとめた発掘調査報告書『Shell Mounds of Oomori』の中で、その土器を「Cord marked pottery」と表現しました。これを後に白井光太郎が「縄紋土器」と訳し、今日では用語として「縄文土器」または「縄紋土器」が使われています。



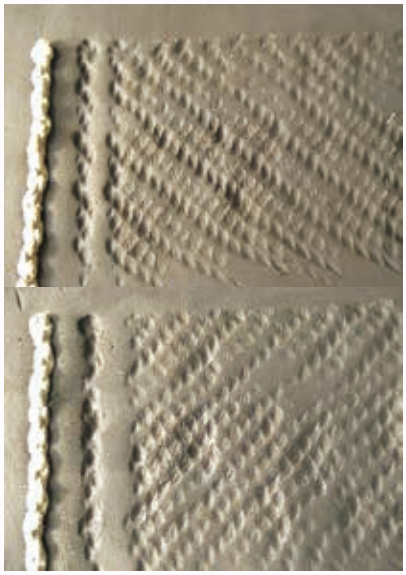
図1　大森貝塚縄目文様

縄文の正体　大森貝塚の発掘調査以降も日本人により貝塚など縄文遺跡が次々と発掘され、縄目文様の土器が出土しました。そこで、どのような道具でどのように縄目文様が付けられたのか様々な案が示されましたが、決め手に欠けました。山内清男は昭和5(1930)年に「斜行縄紋に関する二三の観察」という論文で、撚り合わせることで螺旋状に斜行する縄を、器面に押捺回転させて付けた紋様(文様)が縄紋(縄文)であることを明らかにしました。この論文には縄紋(縄文)に関する基本事項が示されますが、全容は山内の逝去後の昭和54(1979)年に出版された学位論文『日本先史土器の縄紋』に記されています。

縄文土器の文様　皆さんがおなじみの縄文土器のイメージはどのようなものでしょうか。弥生土器と比べると立体的で躍動感があるイメージを持たれる方が、結構いらっしゃるのではないでしょうか。そのように縄文土器には縄文以外に、隆起線文や沈線文など他の種類の文様が色々と使われています。長い縄文時代の最初の時期を草創期と呼びますが、最古の縄文土器は無文であったり、隆起線文が多く使われたりというように縄文はまだ使われず、草創期の終わり頃の多縄文土器群で使われ始めました。それでは、主な文様についてお話ししていきます。

縄文　繊維の束に時計回り(右：r)、あるいは反時計回り(左：ℓ)に撚りをかけたものを「0段の縄」と呼びますが、

これは撚りが緩む不安定な縄です。これらをさらに撚り合わせてできた安定した縄を「1段の縄」(0段の縄：2本)、1段の縄を撚り合わせた縄を「2段の縄」(同4本)、以下「3段の縄」(同８本)・「4段の縄」(同16本)とそれぞれ呼びます。撚りは右あるいは左上がりの螺旋状になるので、回転押捺は螺旋の軌跡が45°の角度をもった右上がり、あるいは左上がりの斜行した条となって連続的に表われます。条を観察すると、撚り合わせる前段の縄の圧痕が節として観察できます。「1段の縄」では繊維の束が筋状に表われだけで「無節」です。「2段の縄」は単体の節が表われる「単節」、「3段の縄」は節の中が２つに分かれる「複節」、「4段の縄」は節の中が４つに分かれる「複々節」となります。「2段・単節の縄」が縄文時代を通じてよく用いられた縄になります(図2)。


図２　単節縄文

縄文の使用は早期初頭に引き継がれますが、縄を棒状の芯に絡げた撚糸文(絡条体回転文)(図3)と併用された後、ほとんど途絶えた状態になります。前期初頭から中葉まで続く羽状縄文土器群で再登場しますが、この時期には山内が解明した複雑に撚り合わせた縄文原体が作られ、直前段合撚(図4)など、美妙たる縄文の最盛期となります。また、結節や結束という結び目や束ね方の工夫、環付末端など条の末端の変化、軸にする縄文原体に別の縄文原体を絡げた附加条(図5)など、バリエーションがあります。前期後葉諸磯式に磨消縄文が一時登場しましたがすぐ途絶え、それ以降の縄文は単純化して主に地文の役割を果たす存在となりますが、中期後葉加曽利Ｅ式後半で磨消縄文は本格採用となり、新たな美妙を生み出します。後期前葉後半以降の精製土器では、器面に沈線による区画や図形を描き、磨消縄文(充填縄文)が入った縄文地と無文地を巧みに組み合わせます。無文地は入念に研磨され、縄文地を際立たせる効果があります(図6)。


図３　撚糸文
(踊ヶ作遺跡)

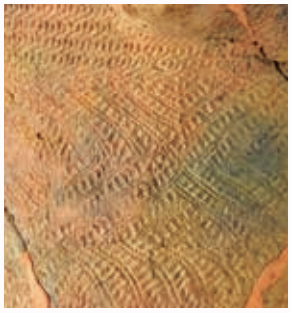

図４　直前段合撚
(稲荷前遺跡)


図５　附加条２種
(駒形遺跡)


図６　縄文地と無文地
(西広貝塚)

隆起線文　粘土紐を器面に貼り付けた、隆起した線による文様です。隆起線文は草創期に登場し、中には細い粘土紐を貼り付けたミミズ腫れのような微隆起線文があります。草創期前半以降、長らく隆起線文は途絶えた後、早期中葉の田戸上層式、早期末葉の条痕文系土器群で採用されますが、本格的には中期に入ってからになります。中期では区画文や懸垂文、貼付文、突起など立体的な造形の主役として盛んに用いられます。

沈線文・結節沈線文　器面にヘラや竹管を加工した工具などを押し当てて引いた線による文様で、縄文時代を通じて普遍的に用いられます。最初に盛んに用いられるのは早期中葉の三戸式と田戸下層式、田戸上層式で、これらは総称して沈線文系土器群と呼ばれています。竹管の芯は中空であるため、末端を器面に刺した場合は円形刺突文になります。前期初頭から後葉までは円形刺突文や、竹管を縦に切断した半截竹管内側を用いた平行沈線文や爪形文が施文されます。中期前葉になると、半截竹管は押し引きして用いることが多くなります。半截竹管の内外をそれぞれ用いたり、先端を抉ったり、斜めに切ったりしたものを器面に当てる角度や部位を変えたりすることで、様々な竹管文のバリエーションが生まれます。押し引きによる沈線には節が生じるので、結節沈線文と呼ばれますが、このような結節沈線のバラ


図７　沈線文・結節沈線文
(半截竹管内側)


図８　沈線文・結節沈線文
(半截竹管外側)

エティーは中期前葉の阿玉台式前半で発達したもので、角押文と特に呼ばれてこの型式の大きな特徴となります。半截竹管の内側を引くと平行沈線文が描出されますが、強く押し付けて引くと半隆起線となり、その際に押し引きして引くと結節した半隆起線文(結節浮線文)になります。

凸凹文様のコラボ　隆起線文系の文様は凸文様、沈線文系の文様は凹文様と言え、このコラボレーションが立体感を演出します。前期末葉の諸磯ｃ式・十三菩提式から中期に向かって、躍動感のある立体的な土器となっていきます。千葉市文六第2遺跡出土の十三菩提式は、多重に器面を埋め尽くす幾何学的な結節沈線文間の各所に、沈刻三角文を配します(図9)。中期になると、隆起線文が効果的に使われ、凸凹文様のコラボが本格的になります。市川市鳴神山A貝塚出土の勝坂式は、口縁部の突起から底部に向かって直曲線的に開放される隆起線文の間を、同じく直曲線的な複列の結節沈線文と沈刻文が器面を埋め尽くします(図10)。柏市大松遺跡出土の勝坂式は、口縁部から胴部上半まで隆起線によって三角形を基調とした区画文が形成されます。その内部に渦巻きを基調とした隆起線文と沈線文がバランスよく割り付けられ、その間に沈刻三角文が効果的に配置されています(図11)。


図9　十三菩提式(文六第２遺跡)


図10　勝坂式(鳴神山Ａ貝塚)


図11　勝坂式(大松遺跡)


図12　加曽利ＥⅠ式(向台貝塚)

市川市向台貝塚の加曽利ＥⅠ式は、地文の縄文上に展開する口縁部区画の文様に凸凹文様のコラボレーションが見られます。区画文上下端と、その間をつなぐクランク文、渦巻き状の突起は、いずれも沈線文を沿わせた整った隆起線文で描かれています(図12)。胴部は地文の縄文上に直曲線的な沈線文が展開しており、クランク文や沈線文の先端に見られる剣先文とともに、南東北地方の大木式系の文様です。

貝殻文　貝殻の殻表面や腹縁などの部位を使って、器面を引っ掻いたり、突き刺したり、押し付けたりなど、いろいろな施文手法によって付けた文様の総称です。殻の表面に放射肋が刻まれ、殻内面の腹縁が鋸歯状になる二枚貝のハイガイ・サルボオを主に用いますが、腹縁が平滑なハマグリも少し用います。貝殻文が最も古くに用いられたのは、北海道と北東北地方に分布の中心がある早期中葉の貝殻・沈線文土器です。関東地方ではこれよりやや遅れた早期後葉から末葉の条痕文系土器群で盛んに用いられました。この時期の貝殻文は主に、ハイガイ・サルボオの殻表面で器面を引っ掻いた貝殻条痕文(図13)で、縄文海進による海産資源の本格利用の開始時期と一致します。

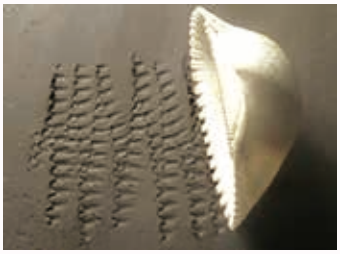

図13　貝殻条痕文(サルボオ)

前期後葉から末葉の東関東地方に分布の中心がある浮島式と興津式でも貝殻文が多用されますが、主体は貝殻腹縁文です。施文具が貝だけに縄文や竹管文に比べ、バリエーションが少ないのですが、腹縁の当て方を工夫してバリエーションを生み出しています。浮島式の貝殻文は、腹縁の支点を交互にずらしてロッキングする波状貝殻文です(図14・15)。興津式ではロッキングの際に押し引きを加えます(図16・17)。


図14　浮島式の波状貝殻文(ハイガイ)


図15　浮島式の波状貝殻文(サルボオ)


図16　興津式の波状貝殻文(ハイガイ)


図17　興津式の波状貝殻文(サルボオ)

文様の移り変わり　以上、主な文様についてお話ししてきましたが、これらの文様は長い間使われ続けた縄文土器の中でどのように変遷してきたのか、深鉢を対象に概ね表したのが図18になります。

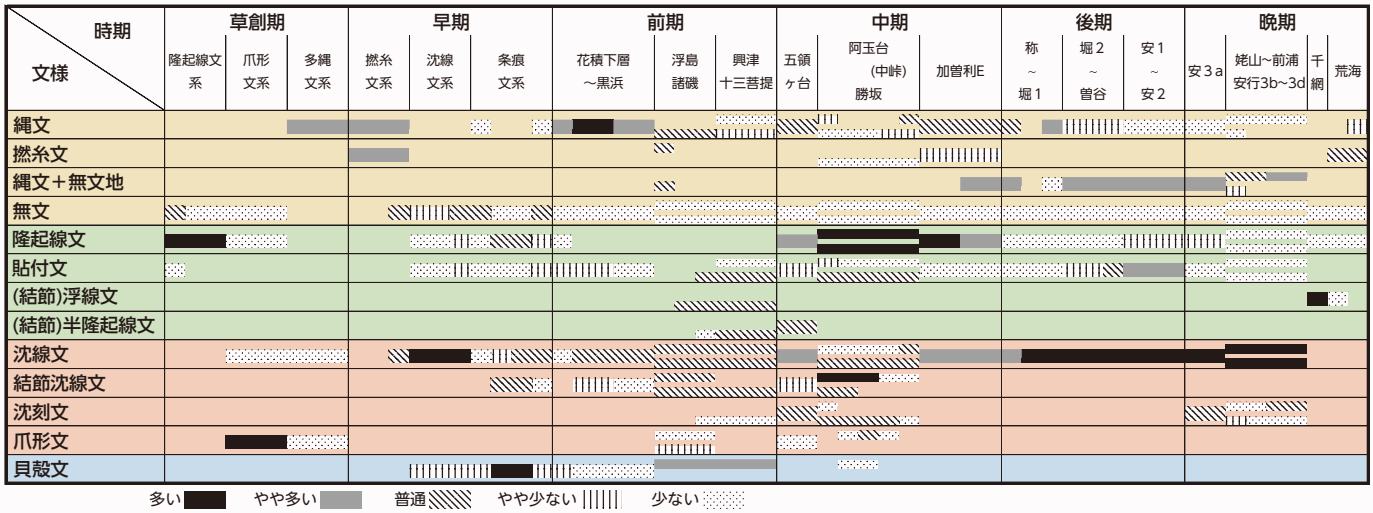


図18　主な文様の変遷

(2)造形の美妙

①器形の美妙　縄文土器の器形には、今日まで引き継がれる機能・用途に基づいたフォルムから、今日では機能・用途が想像できないような独創的なフォルムを呈するものまで、多種多様な造形があります。深鉢以外の器種の分化は、希に早期に認められますが、前期前葉関山(せきやま)式から次第に器種が増え、後期前葉をその前段階として中葉以降、多種多様な器種が創作されます。ここでは展示資料に選定した器種を幾つか紹介します。

浅鉢　口径に対して器高が低い器形を呈する器種です。縄文土器の器種の主体を占める深鉢(ふかばち)が煮炊きを中心に多目的な用途が想定されるのに対し、浅鉢(あさばち)は一部に被熱の痕跡が認められるものの、専ら供食の容器や捏ね鉢のような調理具としての用途が想定されます。時期的には前期前葉の関山式に出現し、前期後葉の諸磯式には縁に小孔を巡らしたり、外面に磨消縄文や爪形文で飾り付けたりした、多様なフォルムの浅鉢が作られます。この浅鉢は墓の可能性がある土坑出土の例が複数あり、図19の流山市三輪野山宮前(みわのやまみやまえ)遺跡出土例もその一つです。中期前葉以降は内外面とも無文の浅鉢が主体を占めますが、後期前葉から中葉では広がる口縁部内面に沈線文による装飾が施されます。後期中葉から晩期では、外面に縄文地と無文地を巧みに組み合わせた図柄の浅鉢が発達します。



図19　浅鉢(三輪野山宮前遺跡)

台付鉢　鉢や浅鉢に台(脚)がついた器形で、供食の容器としての用途が想定されます。時期的には前期前葉の関山式に出現し、器種に占める割合は僅かながら断続的に晩期まで作られています。中期の台付鉢の台部(脚部)には透孔が複数認められる事例が多く、図20の松戸市馬乗場(うまのりば)遺跡の事例もその一つです。



図20　台付鉢(馬乗場遺跡)

有孔鍔付土器　平口縁の直下に小孔と鍔が巡る壺形の器形で、隆起線による文様が施されます。用途は「種子貯蔵説」「酒造具説」「太鼓説」が提唱されましたが、定かではありません。この器種は中部地方で中期初頭に出現し、中期前葉から中葉に最盛期を迎え関東地方や東北地方まで広がりますがその後、器形も鉢形に変容して末葉には消滅します。中部地方の有孔鍔付土器には、隆起線による顔面や体部を抽象的表現したものや、深鉢と変わらぬ文様が施されるものが含まれます。図21は柏市大松遺跡出土の中期前葉阿玉台式の有孔鍔付(ゆうこうつば つき)土器で、東関東では古手のものです。



図21　有孔鍔付(大松遺跡)

注口土器　土器に注ぎ口が付く形式と器種は多様です。深鉢に注口(ちゅうこう)が付くものは、草創期の多縄文系土器や早期沈線文系田戸上層式に少例認められますが、いずれも注口の位置が口縁部近くにあり機能が果たせません。前期前葉関山式では片口注口が付いた深鉢が出現しますが、この形式では液体を注ぐ機能は果たせます。図22は野田市稲荷前(いなりまえ)遺跡の事例です。前期後葉から中期末葉まで注口土器は安定しては継続せず系統的にも不明で、八千代市ヲサル山遺跡出土の阿玉台式の希な例です(図23)。中期末葉に口縁部に有

孔の鍔が付く注口土器が出現します。図24は佐倉市江原台遺跡の例です。土瓶や急須、薬缶のフォルムにつながる注口土器は後期前葉堀之内式に出現し、千葉県を含め関東地方独自のものは晩期前葉まで作られますが、時期によっては他地域で作られたものが使われます。晩期中葉以降は関東地方で注口土器は作られず、東北地方大洞式系の注口土器が全体を占めます。堀之内式から加曽利B式の注口土器は器形、把手の形態、文様などに多様性があり、造形的に優れています。図25の佐倉市宮内井戸作遺跡の事例もその一つです。



図22　片口注口土器(稲荷前遺跡)



図23　片口注口土器(ヲサル山遺跡)



図24　有孔鍔付注口土器(江原台遺跡)



図25　注口土器(宮内井戸作遺跡)

異形台付土器　筒形の口縁部と、袖が左右に付いたように膨らんだ胴部から成る器部に台部が付く器形で、胴部には単数または複数の注口状の突起が付きます。機能・用途が特定できない独創的なフォルムを呈する器種の代表格です。時期的には後期中葉加曽利B２式から後葉安行２式の間で変遷します。異形台付土器は遺構内に意図的に置かれた後に埋められたり、焼土や灰などが関連する様子で出土したりというように、千葉市加曽利貝塚、佐倉市井野長割遺跡など、出土状況に特殊性が認められるものが複数例あります。また、型式学的特徴や大きさなどが似た2個がセットで出土するものも、東京都町田市広袴遺跡、鎌ケ谷市中沢貝塚(図26)、君津市三直貝塚(図27)など複数例あります。この状況から類推すれば、儀礼的行為に用いられた祭器の可能性が考えられます。時期が新しくなるにつれて器部には透孔が目立つようになることから、液体を伴う容器としての機能は果たせないと考えられ、例えば燻煙を伴う香炉などの用途が想定されるため、先に述べた可能性は支持されるでしょう。図28は佐倉市井野長割遺跡出土の香炉形土器で、上部は三窓式です。図29は市原市西広貝塚出土の吊手土器で、上部は二窓式です。香炉形土器と吊手土器は、器部に台部が付く器形の基本構造が異形台付土器と似ており、器部に橋状の把手が付く点で共通性があります。



図26　異形台付土器(中沢貝塚)



図27　異形台付土器(三直貝塚)



図28　香炉形土器(井野長割遺跡)



図29　吊手土器(西広貝塚)

手燭形土器　把手のある板状の台部の端に鉢状の器部が載る器形が、持ち歩くのに便利なように柄を付けた燭台に様子が似ていることから手燭形土器と呼ばれていますが、器部は形骸化しているので手燭形土製品と呼ぶべきという意見があります。また、形態的に仏具の柄香炉のほうがふさわしいので、柄香炉形土製品と改称すべきとの意見もあります。時期的には後期後葉安行１式を発生期とし、末葉安行２式から晩期前葉安行３c式・3d式の間で変遷します。終末期の異形台付土器は注口部の突起化、台部の消失、器高の低平など変容が顕著ですが、ここから分化した器種が手燭形土器と考えられ、透孔も伴うことから異形台付土器と同じ用い方が想定されます。平均的なサイズは市原市能満上小貝塚例(図30)のような全長12㎝前後となりますが、佐倉市吉見台遺跡例(図31)は全長約16㎝とビッグサイズです。



図30　手燭形土器(能満上小貝塚)



図31　手燭形土器(吉見台遺跡)

②意匠の美妙　縄文土器の意匠には対象物の特徴を的確に捉え、何を表現しているのか想像がつくものがある一方で、かなり抽象化しているため対象物が特定できないものもあります。いずれにしてもその独創的な表現力には脱帽です。意匠は口縁部上の突起の先端に付いたり、器面に付く文様で表現されたりして、立体的で美妙な装飾が主になります。今回は人と動物の意匠を紹介します。

人の意匠：顔面　顔面の意匠は中部地方の前期末葉に発生します。発生期の顔面は外向きだけで、千葉県からは１例ですが、八千代市赤作遺跡で平口縁から突出したこの時期の顔面突起が出土しています。顔の輪郭と目口は沈線と沈刻、眉弓は剝落していますが隆起線で表現されます（図32）。流山市中野久木谷頭遺跡では、平口縁に付けられた中期前葉阿玉台式の顔面突起が出土しています。眉弓の隆起線、目口の角押文はこの型式の文様です（図33）。中期前葉から後葉の勝坂式期では、中部地方から西関東地方を中心に顔面把手が発達し、最盛期を迎えます。顔面の意匠と隆起線による眼鏡状の立体的な突起が一つの把手の内外に対向する場合が多く、顔面は外向きと内向きの両方があります。図34の市原市草刈貝塚例は外向き、図35の茂原市川代遺跡例は内向きです。これらは中心地域から運ばれた可能性があります。


図32　顔面突起（赤作遺跡）


図33　顔面突起（中野久木谷頭遺跡）


図34　顔面把手（草刈貝塚）


図35　顔面把手（川代遺跡）

後期から晩期では顔面意匠は顕在化しませんが、少数見られます。鎌ケ谷市中沢貝塚例は加曽利Ｂ式の波状口縁の深鉢の内面に付けられたもので、輪郭と眉弓、鼻は隆起線で、目口は沈線で表現されています（図36）。図37は我孫子市下ヶ戸貝塚出土の安行3b式の精製土器の口縁部で、貼付文が割とリアルな顔面表現となっています。


図36　顔面貼付文（中沢貝塚）


図37　顔面貼付文（下ヶ戸貝塚）

人の意匠：人体　人体の意匠は器面に隆起線を貼り付けて表現されたもので、中期の事例が中心となります。最盛期の中部地方の事例には顔面意匠と一体化したものも見受けられます。千葉県出土の事例は少数で、いずれも中部地方から西関東地方を中心とした勝坂式に来歴が求められます。図38は柏市中山新田Ⅰ遺跡の勝坂式初頭の事例で、四肢を広げた抽象的な表現です。図39は市原市草刈貝塚出土の鉢です。3本指の手が表現された勝坂式後半の事例で、柏市小山台遺跡出土の浅鉢にも類例があります。中心地のような顔を含めた全身を表現した、いわゆる土偶装飾の事例は今のところありません。


図38　人体文（中山新田Ⅰ遺跡）


図39　人体文（草刈貝塚）

動物の意匠：イノシシ　動物の意匠は、関東・中部地方の前期後葉諸磯b式期に発生します。諸磯ｂ式の波状口縁には、動物の顔を模した小さな突起がよく付けられますが、この突起には目と鼻孔が付く飛び出た口先が表現されることから、イノシシの顔の意匠と考えられます。次第に表現が省略されて単なる円形貼付文となり、次の諸磯c式には引き継がれずに短命で終わってしまいます。千葉県でも一定量の出土が見られ、この変遷が辿れるものが出土しています。図40は四街道市木戸先遺跡例で表現が明確ですが、図41の流山市三輪野山宮前遺跡例では目と口先の表現がやや簡略化されています。安中市中野谷松原遺跡をはじめ、群馬県出土のものが質量ともに他より抜きん出ています。諸磯b式には浮線文系と沈線文系の文様系統が存在しますが、獣面突起は圧倒的に浮線文系に付く突起です。群馬県では浮線文系が優勢で出土量の多さと調和的です。千葉県出土のものも文様のわかるものはすべて浮線文系です。


図40　獣面突起（木戸先遺跡）


図41　獣面突起（三輪野山宮前遺跡）

動物の意匠：鳥　鳥の形を模した意匠は、イノシシやヘビとともに前期末葉から中期初頭の北陸地方で盛んに作られ

ます。形態的には土器に一つ、首をもたげたような形で外向きに付くのが基本です。石川県能登町真脇遺跡出土の「鳥さん土器」が有名で、この土器は浅鉢に付いた全体の形状から鳥全体を模した鳥形土器と言えます。中期末葉加曽利ＥⅣ式から後期初頭称名寺式では、首をもたげた鳥の頭を模した意匠が東北地方南部と関東地方でたくさん作られています。土器の平口縁あるいは波状口縁に付く突起で、鳥頭が付く部分が突出した立体的な造形となります。ほとんどすべてが内向きで、この時期の口縁部や突起の形状によく符合しています。鳥頭の意匠は鳥の嘴など特徴を的確に捉えているものもあれば、抽象化の結果、ヘビなどとの識別が難しいものもあります。図42は市原市柏野遺跡出土の鳥頭形突起で、鋭い嘴や際立った眉斑の表現などから猛禽類の特徴を良く捉えています。

弥生時代以降、鳥を神聖視した鳥形の土器や木器があり、古代の文献にも鳥を介在した信仰心にまつわる記述があります。このような思いが果たして縄文時代まで遡るものであるか否かは定かではありませんが、墓の可能性のある土坑から出土する事例が、群馬県前橋市清里陣場遺跡、印西市馬込遺跡（図43）などで出土しているので、可能性はあるのかもしれません。



図42　鳥頭形突起（柏野遺跡）



図43　鳥頭形突起（馬込遺跡）

動物の意匠：その他　人体の意匠と同じように、器面に隆起線を貼り付けて表現しており、やはり中期の事例が中心となります。最盛期の中部地方では、器面にダイナミックに貼り付けられた動物意匠が見受けられます。ヘビ、すなわち蛇体を抽象化して表現したものは多く、他にサンショウウオやカエルなどを表現したのではないかと思われる抽象文もありますが、中には抽象化が進んでいて対象となった動物の種類が特定できないものもあります。人体意匠同様に千葉県出土の事例は少数で、中部地方から西関東地方を中心とした勝坂式に来歴が求められます。図44は船橋市ユルギ松遺跡出土例で、器面の対向する位置に二つの抽象化された動物意匠が貼り付いています。いずれも無文の口縁部下に眼鏡状突起が付きますが、突起を尻尾とし弓なりになって頭を垂れた動物と、突起を頭として四肢を広げた動物の意匠がパネル文の胴部に描かれています。



図44　動物抽象文（ユルギ松遺跡）

（3）彩色の美妙

彩色土器とは　顔料等で色を塗った土器を彩色土器と呼び、縄文人の色による飾りの美意識が窺えます。赤彩された例が多く、エドワルド・S・モースが大森貝塚から出土した土器と貝殻に付着した赤い顔料に注目したのが日本で最初です。その後の資料の追加と研究の進展によって、顔料の成分は酸化第二鉄を主成分としたベンガラと硫化水銀を主成分とした朱であることがわかりました。これらの顔料のうちベンガラは縄文時代を通じて用いられており、朱は後期以降に用いられています。彩色には漆などを固着剤として顔料を塗彩する方法と、発色しやすい粘土を用いたり、焼成方法を調整したりして色付けする方法があります。

彩色による表現　塗彩による彩色例をいくつか紹介します。図45は市川市道免き谷津遺跡出土の諸磯b式の鉢で、黒漆の下地に赤漆で文様を描いています。図46は横芝光町東長山野遺跡出土の中期中葉の台付鉢で、口縁部文様に赤彩が認められます。図47は銚子市粟島台遺跡の浅鉢で、内面に幾何学文が鮮明に描かれています。図48は市川市道免き谷津遺跡出土の加曽利Ｂ２式の算盤玉形の深鉢で、無文地と区画沈線に赤彩しています。



図45　彩色土器（道免き谷津遺跡）



図46　彩色土器（東長山野遺跡）



図47　彩色土器（粟島台遺跡）



図48　彩色土器（道免き谷津遺跡）

第２章　縄文土器のライフサイクル

縄文土器は1万年以上にわたり作り続けられた世界史的にも無類の古さの器であり、日本の焼き物のルーツと言えます。土器の発明という技術革新により、気候変動で変容した動植物を利用した煮炊きが広まり、日本列島に住んだ人々の生活を大きく変えました。土器は粘土などの原材料を入手して製作され、主に調理の道具として使用されます。その過程で壊れたり、使い古されたりした土器は補修されたり、本来の用い方とは違う用途で転用されたりします。そして、最後には役目を終えて、あるいはモデルチェンジなどによって廃棄されます。ここでは遺跡から出土した資料を基に、縄文土器のライフサイクルについて紹介します。

（１）製作

縄文土器製作の実験的研究　昭和40年代半ばに加曽利貝塚博物館を拠点として新井司郎が行った縄文土器製作の実験的研究によって、土器製作の各工程における課題が体系的に究明されました。工程を要約すると、①原材料である粘土や混和剤を入手したうえで素地土づくりを行う。→ ②素地土を粘土紐にして積み上げて成形する。→ ③文様の施文と整形を行う。→ ④ 乾燥後、焼成して完成　というものです。その内容は机上の理論に陥りがちな考古学者にとって示唆に富むものですが、昭和48(1973)年発刊の『縄文土器の技術　－その実験的研究序説－』に研究途上の成果が公表されたものの、新井の早逝によりこの分野の研究は中断を余儀なくされました。土器製作技術研究のパイオニアである新井の後継者たる戸村正己は、製作の原点である成形について見直すため、加曽利貝塚出土の数千点に及ぶ加曽利Ｅ式の土器片から、約2,500点を数える「短冊状土器破片」を抽出し、詳細な観察と判別、統計処理によって得た多くの情報を基に、加曽利Ｅ式のキャリパー形土器の成形技法について言及しました。今回は成形に絞り、戸村が明らかにした内容を要約して紹介します。

土器成形と短冊状土器破片　「短冊状土器破片」とは長方形で定形に割れた土器片で、その縦幅が粘土紐積み上げの高さを反映していると考えられます。「短冊状土器破片」(以下「短冊破片」)の平均的な縦幅は約3㎝、約3.5㎝が最多であり、次いで約2.5㎝、約4㎝の範囲のものが全体の約70%を占めます。そして、これらの土器の厚みは平均で約1㎝前後です。このデータを基に、焼成により生じる概ね15%の収縮率も勘案し成形粘土のサイズを想定すると、太さ約2.5㎝～約3.5㎝の粘土紐を押し潰しながら1段毎積み上げる土器成形が考えられます(図49)。

粘土積み上げ技法　次にいかなる技法によって粘土紐が積み上げられているかについて、「短冊破片」の破断面観察から得られた情報から解説します。技法は概ね積み上げ粘土の接合部が外傾する「外被せ技法」、同じく接合部が内傾する「内被せ技法」、同じく直上に平ら、もしくは馬の背状になる「上被せ技法」の3通りで、希に接合部分に成形強化のためヘラ状工具で刻みを入れた「刻み入れ技法」が各技法と併用されます。

「短冊破片」の観察と判別により、口縁部は「内被せ技法」優勢、胴部は「外被せ技法」優勢という傾向が掴めたものの、成形の在り方は一様ではなく実態は9通りあることがわかりました(図50)。

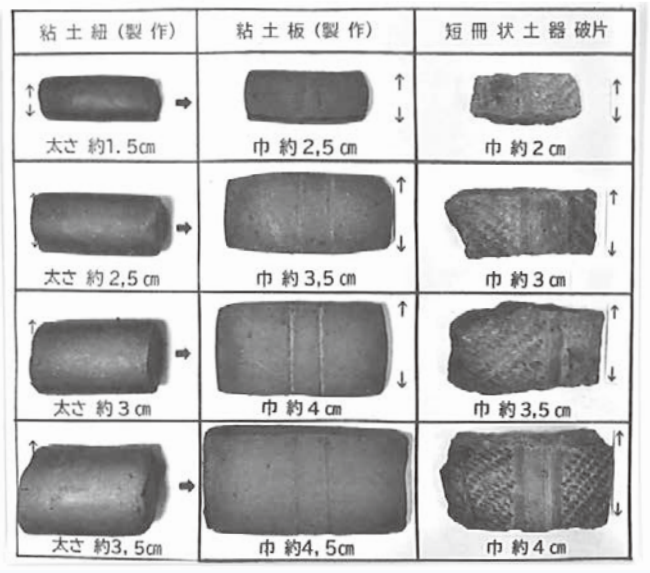


図49　粘土紐と短冊状土器破片の相関関係

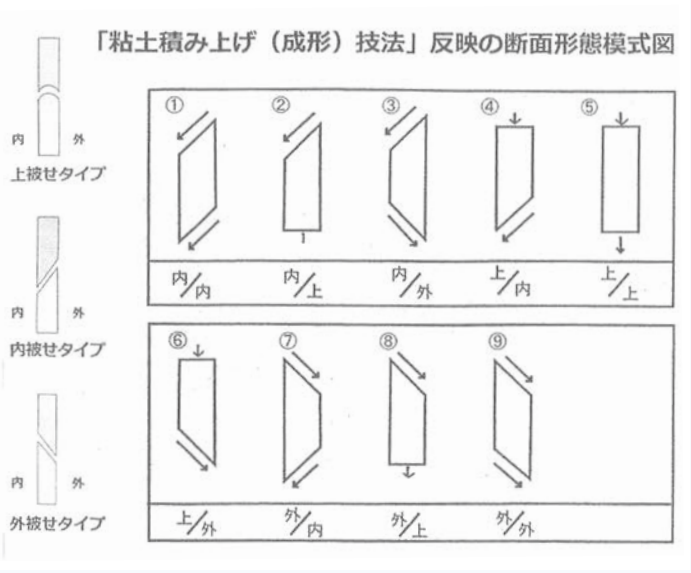


図50　成形技法反映の断面形態模式図

加曽利Ｅ式の粘土積み上げ技法　そこで、この事実を器形全体の成形の在り方で捉えるため、キャリパー形土器の器形全体を15分割し、分割の帰属先を「底部立ち上がり」・「胴部下半」・「胴部上半」・「頸部」・「口縁部」の部位に分け、「短冊破片」の位置と破断面の形状を１片ずつ記録しました（図51）。その結果、「底部立ち上がり」から「頸部」途中までは「外被せ技法」優勢で「上被せ技法」併用の傾向、「頸部」の上部から「口縁部」は「内被せ技法」の駆使傾向が捉えられる中でも、キャリパー形に成形するために「上被せ技法」駆使傾向の部位を設定することを指摘し、加曽利Ｅ式キャリパー形土器は全体では「外被せ技法」を主流としながらも、合理的に他の積み上げ技法を併用していることがわかりました。

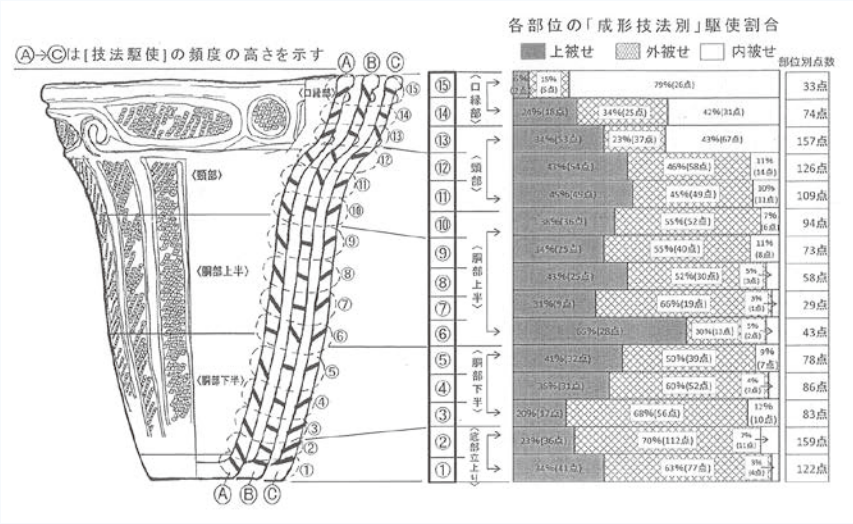


図51　加曽利Ｅ式土器における部位別の「成形技法」の在り方

土器製作の場所と道具　ところで、土器製作はどのような場所で、どのような道具を使って行われたのでしょうか。作業場は作業の連続性から住まいの隣接地とするのが妥当と考えますが、通常の調査範囲からは検出されていません。この事実から作業場は調査で検出されにくい簡単な小屋掛けであったか、調査対象範囲外となることの多いムラ周辺の斜面地などに作られたのかもしれません。製作時に使われた道具も出土品は少なく、実態はほとんどわかっていません。また、土器づくりの際には水平面を保つ道具が必要となりますが、その候補として台形土器があげられます。台形土器は側面に回転運動の持ち手とする孔があり、脚端部が擦れて片減りしていることから土器づくりの作業台と考えられていますが、時期が中期から後期前葉までに限られます。しかしながら、他の時期でも水平を保つ作業台は使われたでしょうから、台地上の遺跡ではほとんど遺らない植物などを素材とした道具があったのではないかと考えます。土器の焼成は野焼きで行われたと考えられますが、遺構として認識することが難しいため、埼玉県川口市石神貝塚、松戸市貝の花貝塚などで土器焼成遺構の可能性のある事例が検出されているだけです。

土器製作を窺わせる遺跡　このように遺跡から得られる情報は非常に少なく不明な部分が多いのですが、他地域では土器製作に関連したと思われる事例が散見されます。山梨県北杜市酒呑場遺跡では、１軒の住居跡から、中期中葉期の台形土器２個（１個は深鉢底部の転用）がそれぞれ未焼成粘土とセットで出土しており、台形土器の素地土づくりとの関連が想起されます（図52）。未焼成粘土塊は山梨県韮崎市石之坪遺跡で中期後葉期、酒々井町飯積原山遺跡で中期中葉期の事例があり、いずれも混和剤を入れる前の生粘土であったと思われます。また、山梨県笛吹市前付遺跡では中期後葉期の住居跡内から混和剤として用意されたと思われる砂が貯蔵された土器が、台石や焼成粘土塊とともに出土しています。


図52　台形土器と未焼成粘土の出土状況（酒呑場遺跡）

　東京都町田市多摩ニュータウンNo245遺跡とNo.248遺跡の発掘調査は、中期中葉から後期前葉期の土器製作の一断面を物語る遺構と遺物が検出された貴重な事例です。No.245遺跡は急斜面地に営まれた集落跡、No.248遺跡は谷地に形成された粘土採掘坑群からなる遺跡で、近接した立地です。前者では中期中葉から後葉期の住居跡床面から粘土ブロックが検出されていますが、うち１軒では粘土ブロックにパックされた形で、未焼成土器・台形土器・石皿・敲き石などが状況証拠のように遺されていました（図53）。また、別の住居跡からは失敗作を

焼成した粘土塊が出土しています。No.248遺跡は時期変遷が異なる５つの採掘坑群からなりますが、このことから長期にわたって採集地点を移動しながら計画的に土器製作のための粘土を調達していたことがわかります。そして、浅鉢１個体と土掘り具である打製石斧１点が両遺跡間で接合され、土器の製作地とその粘土採掘地が直接関係していたことを考古学的に証明しました(図54)。しかしながら、No.248遺跡の採掘量を試算すると到底、No245遺跡だけで消費したとは考えられず、周辺流域の遺跡群がこの採掘粘土の消費に関わっていたのではないかと調査担当者は考えています。

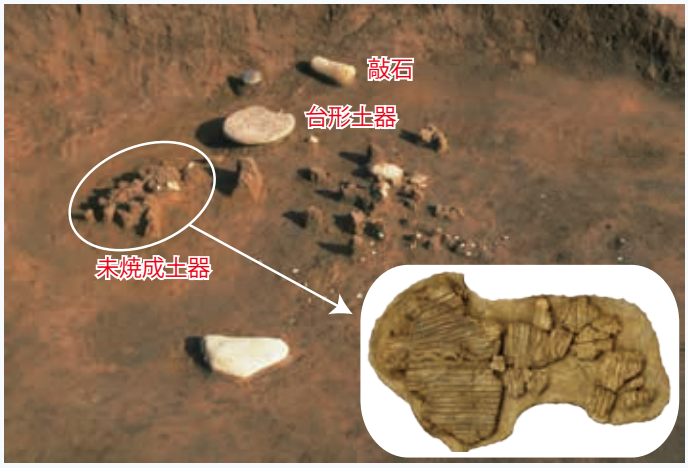


図53　未焼成土器の出土状況(多摩ニュータウンNo.245遺跡)

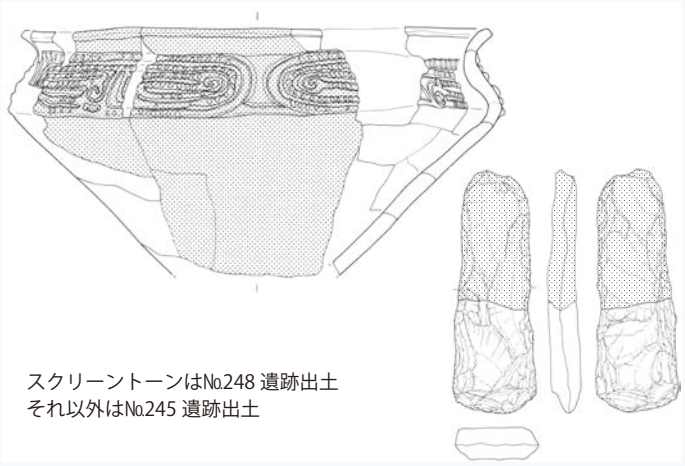


図54　遺跡間接合した土器と石器(多摩ニュータウンNo.245･248遺跡)

(2)使用

土器が使われるようになってからの最も革新的な変化は、土器という耐熱容器の中で水分を使った煮沸調理が可能になったことにあります。煮沸調理が可能になったことで植物質食料の利用範囲が飛躍的に拡大しましたが、これは人類にとって革命的な出来事であり、このことがやがて植物質食料の人為的な栽培・生産、つまり「農耕」につながっていきました。

さて、食物を水分とともに土器で煮沸したらどのような痕跡が残るのでしょうか。まず外面の変化を見ていきましょう。土器は、薪などの燃料を燃やす「炉」の上に設置されて火熱を受けます。はじめ炎が弱いうちは、不完全燃焼のために立ちのぼる炭素が土器の表面に当たり、外面のほぼ全面にスス(煤)が付着します。やがて火力が強くなるとともに不完全燃焼は徐々に解消し、炎が直接当たる土器の胴下半部に付着していたススは燃焼・酸化して消失し、土器表面は明るい赤色に変化します(ス酸化)。

煮沸に使われた土器は、胴部中位付近から上にススが残って黒く見え、胴部下位はス酸化によって明るい色調になっていることが普通です。図55は横芝光町高谷川低地遺跡から出土した晩期初頭の深鉢形土器です。胴中位以上には黒色のススが大変よく遺存していました。土器によっては１～２㎜の厚さにススが残るものもあり、この状態をとくに層状ススと呼んでいます。また、底部には黒いススが残る部分があり、これは薪などの燃料が触れたり近接して存在することで酸素が十分供給されず、やはり不完全燃焼によるススが付着したものです。以上のような痕跡をもつ土器は煮沸調理に使われたことが明確だとして、「深鍋」という呼称も使われるようになっています。また、一部の研究者の間では、ス、ス酸化、コゲはもちろん、薪の位置やしたたり痕、吹きこぼれ痕なども含めて、「ス・コゲ実測図」という形で四面の図を作成し、その土器の使用痕を明示することが行われています。



図55　深鉢形土器(深鍋)とス・コゲ実測図(高谷川低地遺跡)

それでは次に内面の変化を見てみましょう。完形の土器ではわかりづらいので、底部のみが遺存した土器を使って説明します。やはり高谷川低地遺跡から出土した図56は、煮沸に使用された土器底部内面を上から見たところです。上の土器Aは底部全体に黒い付着物があります。これは煮沸調理していた内容物(食物)の水分が、加熱または保熱によって失われた結果、コゲとして付着して残存したものと考えられます。一方、下の土器Bは底面に黒色の付着物がなく、底面より2～3㎝上に付着しています。この二つの土器の差は何でしょうか。

Bは、おそらく水分量の多いスープ状の食物を煮沸した痕跡と考えられます。保熱しながらスープを消費していくと水位が下がってきますが、器表面に着いた内容物は水分が飛んでコゲとして残っていきます。Bの場合、ススが付着するくっきりした境界線まで水位が下がった時に火からおろしたと考えられ、ス付着の境界線は最終的な喫水線ということになります。Aは、水分が完全になくなるまで加熱または保熱が続いたと考えることもできますが、過度な二次加熱の痕跡もないため、むしろ、より固形分の多いシチュー状の食物か、澱粉質の食物を調理した可能性が考えられます。

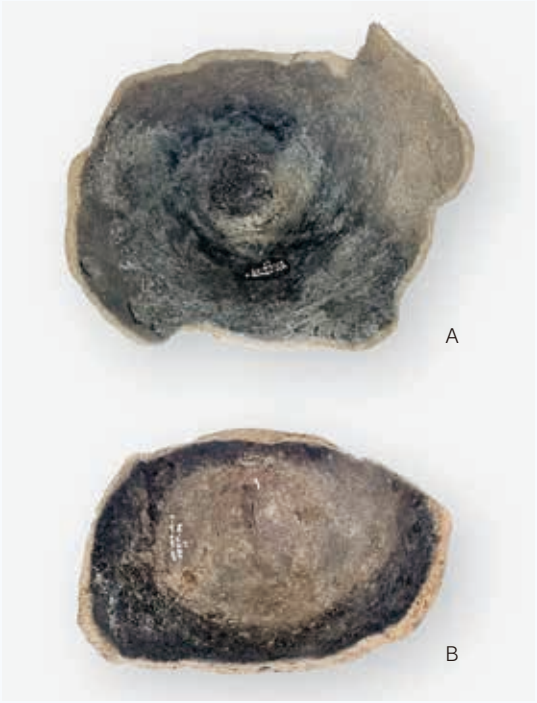


図56　深鉢形土器底部(高谷川低地遺跡)

以上は、土器本来の形状で立てて使用する在り方ですが、別の使い方が想定される例もあります。高谷川低地遺跡から出土した図57Cは晩期初頭の深鉢形土器の大破片です。外面の中央には強烈なス酸化の痕跡が楕円形に残り、周辺は漆黒のススが全体に付着しています。内面には顕著なコゲではありませんが、付着物が認められます。この破片には、四周の割れ口が細かく打ち欠かれた痕跡があり、欠けてしまった土器を再利用して、パレット状に成形した

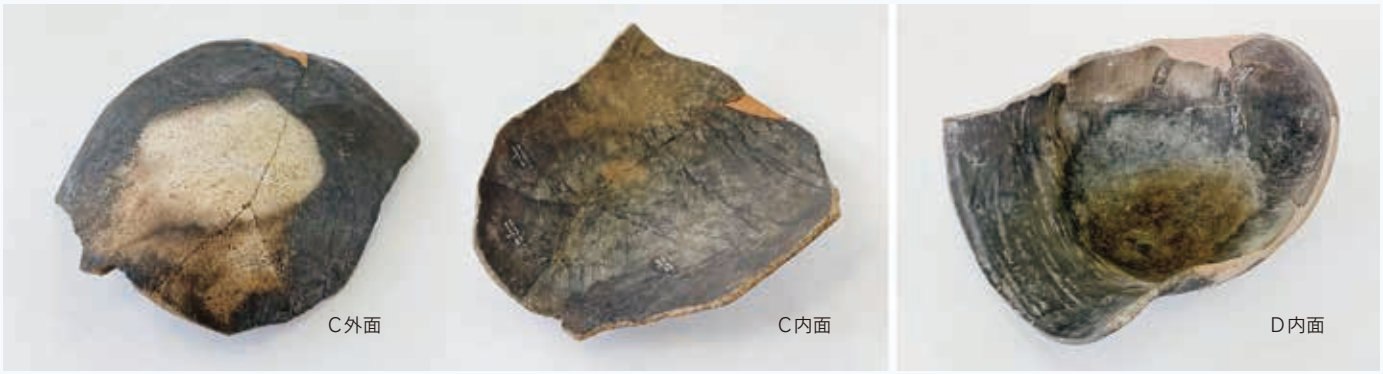


図57　深鉢形土器大破片の使用痕(高谷川低地遺跡)

ものと思われます。その形状から、水を用いる調理ではないことは明らかで、もし食物調理であるとすれば「焼く」調理だと思われますが、食物ではないものを加熱した痕跡の可能性も想定されます。こういうパレット状に整えた縄文土器の例としては、アスファルトのパレットとして使用されたものが東北地方で知られていますが、千葉県はアスファルトの産地から非常に遠く、接着剤としてアスファルトが使用された例もありません。また、器面にもアスファルトは付着していないようです。図57Dは後期後葉の土器の口縁部を残して、「ちり取り」状に成形されています。やはり外面には強烈なススとス酸化が認められ、ス酸化の部位に対応する内面には何かが加熱された痕跡が残っています。

なお、使用痕が全く観察されない土器も重要です。図58は後期後葉の大型広口壺といわれるもので、一見、煮沸調理に使われる深鉢形土器に近い器形です。しかし、同種の土器にススやコゲがみられることは一般的にありません。その大きさや、内面が丁寧に磨かれ、きわめて堅緻に焼成されていることから考えると、おそらく水がめとして使われたものなのでしょう。


図58　広口壺形土器(西根遺跡)

（3）補修



図59　早期条痕文土器の補修孔
（小山台遺跡）

補修孔とは　縄文土器には口縁部を主に径0.5㎝～1.0㎝程度の孔が認められますが、これを補修孔と呼んでいます。補修孔は使用可能と判断した土器を、修復して使い続けるために開けられたと考えられます。口縁端部からタテに入ったヒビ割れの広がりを矯正するため、ヒビ割れに可能な限り近づいた位置で孔を対に開けます（図59）。孔に通した紐が遺っていた出土例もあることから、紐を通して互いを引き寄せて土器を補修したと思われます。深鉢の場合、先ず土器の外側から穿孔し、貫通の見通しが立った段階で内側からも穿孔する外側優勢の両側穿孔です。浅鉢は大きく開く器形なので、開け易さから内側優勢とした両側穿孔の例が多いです。口縁部はヒビ割れが起きやすい部位ですが、ヒビの入りが煮炊きに必要な水位より上にある場合に補修しているのでしょう。しかしながら、液体を内容物としない用途がある浅鉢などには、縦断するような大きなヒビ割れに複数の対向する補修孔を開け、補修している事例が認められます。

補修孔とモース　最初に補修孔に注意を向けたのは、明治10（1877）年に大森貝塚を発掘調査したエドワルド・S・モースです。モースは出土遺物の中に補修孔のある土器片を認め、今日に通じる補修孔に関する考察を何点か行っています。要点をまとめると、補修孔は人々の「Reuse」意識の反映であること。割れ口の縁に接近し過ぎて失敗した孔を開け直している例を取り上げ、ヒビ割れに対する有効な穿孔位置を人々が認識していたこと。開けられた孔の断面形状を観察した結果、補修孔は外側優勢の両側穿孔であること。回転穿孔の道具は粗製の石片あるいは骨片ではないかと推測していること。補修孔のある土器片はたくさん接合したと記していることの5点です。以上の内容から対向する補修孔を認識し、その目的を推察していたと考えられます。

補修孔が認められる時期と地域　現在までの資料の蓄積と研究の進展によって、補修孔は時期的には縄文時代草創期の隆起線文系土器から晩期後半の土器まで、地域的には多寡の差はあれ北海道から九州まで認められます。このことから補修孔による土器の修復技術は、古い時期から列島各地で定着していったものと考えられます。補修孔の平面形状は円形が基本ですが、縄文早期前半には楕円形や溝形などのバラエティが認められます。

補修孔と漆　紐が補修孔に遺る例は、このような植物性の物質が遺存する低地性遺跡から見つかっていますが、中には紐による補修孔の緊縛に伴って表面から漆を塗り込め、固着した例が認められます。平成7（1995）年～平成13（2001）年に発掘調査が行われた東京都東村山市下宅部（しもやけべ）遺跡では、漆や補修孔で補修されている土器が90点出土しています。図60のように補修孔に通した紐に漆を塗り込めた例は散見されますが、補修孔に紐を通して緊縛しただけの深鉢が主体であると報告されています。

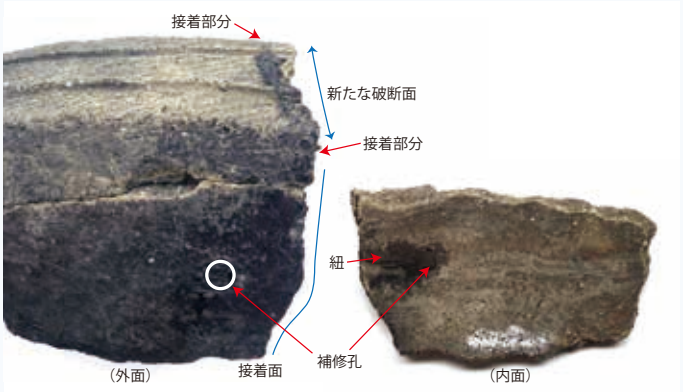


図60　漆による接着と補修孔による緊縛の併用（下宅部遺跡）

（4）転用

補修は修理や再加工によって同じ用途で繰り返し使用する「Reuse」に当たりますが、縄文土器には今までと異なる用途で再利用・再資源化、すなわち転用＝「Recycle」に当たる事例もいくつか認められます。

土器片錘　土器片錘は調理などに用いた土器を素材として、漁網の錘に作り替えたと考えられる土製品です。当時の漁場であった低湿地に立地する市原市市原条里制（いちはらじょうりせい）遺跡から夥しい量が出土しており、この考え方に調和的です。また、台地上に立地する県内の中期前葉から中期末葉までの集落遺跡からも、普遍的に出土しています。加曽利Ｅ式期の佐倉市吉見稲荷山（よしみいなりやま）遺跡では、住まなくなった竪穴住居のくぼみに300点近い大量の土器片錘が一括して投棄されており、この中には土器片錘同士が接合した例があります。同じく加曽利Ｅ式期の千葉市御塚台（おつかだい）遺跡では、竪穴住居の炉体に転用した土器と土器片錘が接合しています。また、千葉市有吉北貝塚（ありよしきた）では中期中葉から後葉期で5,300点余りの土器片錘が出土しています。このようにムラの中では使わなくなった土器を転用して、土器片錘が大量に製作されました。

土器片錘の作り方ですが、製作の項で説明した「短冊状土器破片」（以下「短冊破片」）の割れの性質を上手に利用して

分割した後、長方形や長楕円形に形を整え、長軸の両端に紐掛け用の切り込みを入れたと考えられます。酒々井町墨古沢遺跡では土器片錘同士が接合する複数の事例があり、製作方法を復元できます。図61は横長の縦幅4.0～4.5㎝「短冊破片」を折断した後、それぞれの長軸上に紐掛け用の切り込みを入れていることがわかります。図62は縦幅3.5㎝の「短冊破片」が3段含まれる大形土器破片を用いたことがわかります。



図61　土器片錘の接合１（墨古沢遺跡）



図62　土器片錘の接合２（墨古沢遺跡）

土器片有孔円板　土器片の他の転用例として、円板に整えた中心に孔を開けた土器片有孔円板が挙げられます。孔に軸を通して糸に撚りをかけるために用いた、紡錘車の紡輪と推定されています。香取市多田遺跡では500点以上出土した土器片錘に加えて、土器片有孔円板の製品と未成品が合わせて約200点出土しています。

埋甕炉　竪穴住居の床のほぼ中央には、調理や灯り、暖をとるための炉が設けられました。炉の多くは床を浅く掘りくぼめた地床炉で、使用により焼土や灰などが堆積します。縄文時代を通じて地床炉が一般的ですが、中期中葉前後では地床炉に炉体土器を埋設した埋甕炉や、礫や石器などを付け加えた石囲い炉が他の時期より多く作られます。埋甕炉は、主に調理用であった深鉢などのおおよそ下半分を打ち欠いて転用しています。図63は中期中葉の市原市草刈貝塚の事例、図64は中期後葉の酒々井町飯積原山遺跡の事例です。飯積原山遺跡（78）SI102の炉は長径112㎝、短径90㎝の楕円形の比較的大形の炉ですが、その長軸上に加曽利ＥⅡ式キャリパー形土器と連弧文土器が2連で埋設された埋甕炉です。連弧文土器は西関東系の土器なので、この住居に住んでいた人の出自が気になるところです。



図63　埋甕炉（草刈貝塚）



図64　埋甕炉（飯積原山遺跡）

甕被り葬　遺体の頭蓋骨に土器を被せる埋葬方法を、甕被り葬と呼んでいます。この場合も主に調理用であった深鉢などの転用です。被葬者に土器を被せた理由は定かではありませんが、被葬者あるいはその頭部に何か特別視される理由があったのかもしれません。例えば原因不明の病気や不慮の事故などで亡くなったため、そのような被葬者に対する家族やムラの人々の畏怖の思いから、このような特別な措置がとられたのではないかと想像されます。市原市草刈貝塚は、縄文中期前葉期から後葉期の大規模な拠点集落です。ここからは46体という多くの埋葬人骨が、住まなくなった竪穴住居跡を中心に様々な態様で検出されています。甕被り葬にも図65のように土器を倒立させて頭部に被せている事例の他に、頭部に添えてはいるものの、明らかに被っていない事例もあり、頭蓋骨に対する葬法上の差があったのかもしれません。



図65　甕被り葬（草刈貝塚）

（５）廃棄

本来の用途のために製作し使用した土器は、修復されたり、転用されたりして大切に使われますが、最後には役目を終えて廃棄されます。しかし一方では、モデルチェンジによるものか、もの送り的な行為の所産なのか理由ははっきりしませんが、まだまだ使えそうな土器がまとまって廃棄されることがあります。

窪地への廃棄　発掘調査を行うと遺跡内の様々な場所から土器などの遺物が出土しますが、多くは破片です。中には復元可能な土器が、廃絶された竪穴住居や貯蔵穴の中や、集落内の窪地や斜面地などの土器捨て場から大量に出土する事例があります。山内清男は昭和11（1936）年「武蔵高等学校裏石器時代遺跡の発掘」で、竪穴住居廃絶後の窪地に十数個体の土器が廃棄された事例を発表し、窪地に廃棄する行為は古今を通じて存在すると述べています。昭和後半以降、廃棄行為にはいくつかのパターンがあり、その背景まで追求した研究が盛んに行われ、その後は面的調査によって明らかにされた廃絶遺構内と土器捨て場への廃棄などを対象に、様々な課題の検討が続けられています。仮にこれらまとまりのある土器がゴミとして廃棄されたのであれば、ムラの機能を維持するために行われたゴミ処理の結果と捉えることができるかもしれません。

養安寺遺跡での廃棄　東金市・大網白里市養安寺遺跡では、中期中葉から後葉期を主体とした土器のまとまった廃棄の事例が、廃絶された竪穴住居と貯蔵穴に少例、斜面貝層に複数例認められます。SK238は断面形が袋状を呈する貯蔵穴で、個体7点をはじめとする中期中葉の土器などが、底面直上から覆土中位まで出土しています(図66)。斜面貝層は北斜面(SS009)と北西斜面(SS003～ SS007)に形成されています。SS009は大規模な貝層ですが、貝層内と貝層下と貝層上の土層中にはそれぞれ、遺物包含層が形成されています。これらを合わせると中期中葉から後期前葉まで断続的ですが、長期にわたって土器などが大量に廃棄されています(図67)。貝層の主体的な時期は中期後葉の加曽利Ｅ式前半ですが、台地上の集落にはこの時期の竪穴住居や貯蔵穴が少なく、大規模に形成された貝層とともに土器などの廃棄はこのムラの人々だけで行ったとは考えられません。周辺には東金市羽戸遺跡や同鉢ヶ谷遺跡、同小野遺跡など、この時期の遺構内貝層だけが形成される集落があることから、これらの遺跡が斜面貝層の廃棄に関わったかもしれません。

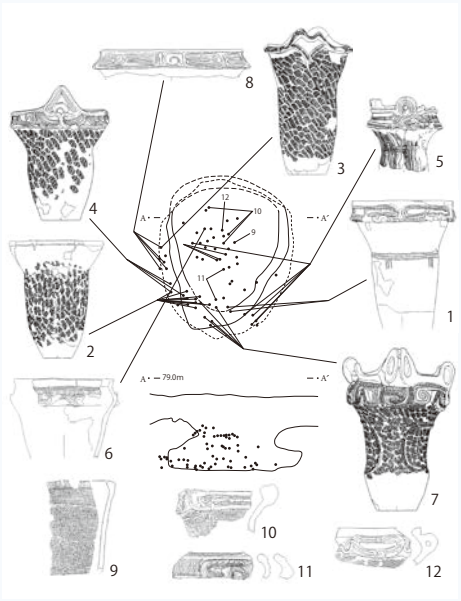


図66　SK238

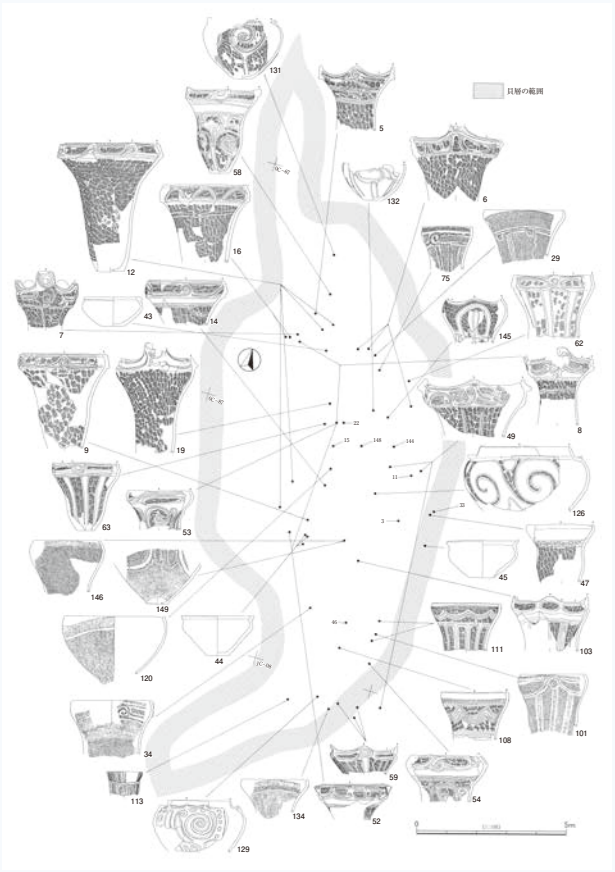


図67　SS009

コラム１　土器の圧痕研究

縄文土器の表面には、土器を作る時に混ざった植物の種や虫などの痕跡が“くぼみ”として残されていることがあります。圧痕研究とは、この“くぼみ”に、シリコンゴムを流し込み、型取りしたレプリカから、“くぼみ”の正体を特定し、当時の植物利用などを明らかにしようとするものです。「レプリカ法」と呼ばれるこの手法は、日本では1980年代に初めて提唱され、近年になって新しい発見を続々ともたらしています。

圧痕として発見される主なものとしては、食用や薬用に利用される植物の種実をはじめ、昆虫や小動物の糞などがあげられます。特に、エゴマやダイズ、アズキなどの発見からは、特定の植物に対して栽培行為が行われていた可能性が指摘されています。

圧痕研究は、植物利用だけでなく土器製作の実態についても新しい知見をもたらしています。土器圧痕からは、コクゾウムシやゴキブリなどの家屋害虫、ネズミの糞なども見つかっており、これらの生物の生態や特性から、家屋内で縄文土器が製作されていた可能性が高いことが指摘されています。実際に、東京都多摩ニュータウン遺跡のように、未焼成の土器や生粘土などの原材料が竪穴住居跡内から発見された例もあり、圧痕研究の成果と併せて、現在では屋内での土器製作が有力視されています。

県内で見つかっている土器圧痕のなかに、全国的にも珍しい例が印旛沼南西岸に位置する八千代市ヲイノ作南遺跡で見つかっています。写真2は縄文前期中葉の土器底部の小さな破片ですが、底面に複雑な形をした圧痕が認められます。観察の結果、イワシやコイの特徴をもつ魚の脊椎骨であることがわかりました。仮にイワシであれば、縄文海進によりこの地域まで海が到達していたことを示す証拠となるかもしれません。



写真１　マメ類？圧痕
（小山台遺跡）



写真２　魚骨圧痕
（ヲイノ作南遺跡）

第３章　土器型式と標式遺跡

1万年以上にわたり、日本列島では膨大な数の縄文土器が製作され、使われてきたことが、遺跡から出土した縄文土器からわかります。一つ一つは手作りでありながらも、これら個体の間には文様や形などの属性に共通したまとまりを見出すことができます。このように共通の属性により抽出された個体群を他と区別することを型式分類と呼び、○○遺跡出土の土器を標式として型式を設定した場合、その型式を○○式というように命名しています。こうしたまとまりは時間の流れの中で変遷したり、一定の地域で共通したりすることから、年代観や地域性の指標となります。

昭和初期、山内清男は日本列島各地の縄文土器について型式を設定し、年代差・地方差の大綱を縄文土器編年としてまとめました。今日、その編年を基礎とし、新資料の増加に伴い後進の研究者が行った型式分類によって細密な編年が整っています（図68）。

明治以降、首都東京に近いことから千葉県では様々な形で土器が発掘されてきました。そのため、関東地方の土器型式には千葉県の遺跡を標式としたものが見られます。ここでは山内が設定した土器型式をはじめ、7つの土器型式を標式遺跡（図69）とともに紹介します。

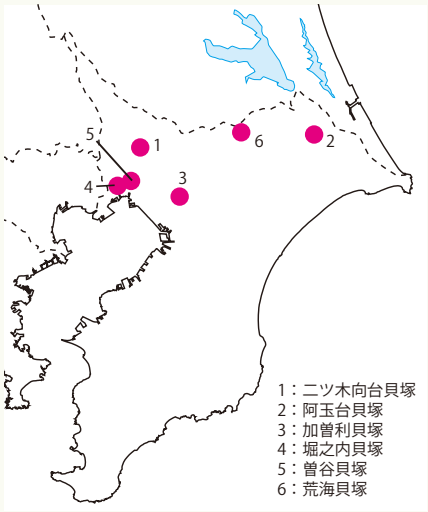


図69　標式遺跡位置図

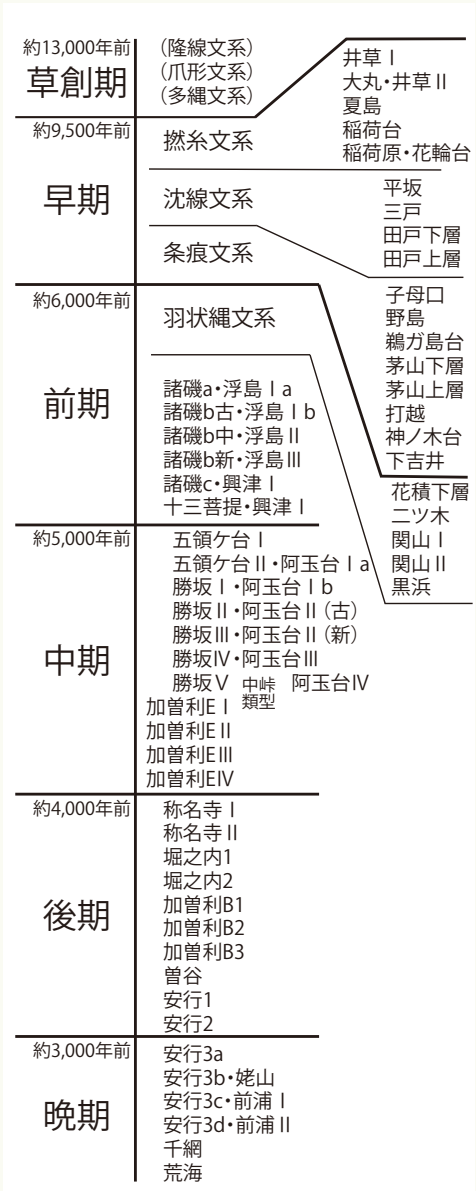


図68　千葉県を中心とした縄文土器編年

(1)二ツ木式

二ツ木式は、松戸市二ツ木向台貝塚を標式遺跡とした前期前葉の型式です。昭和25（1950）年、遺跡は国道の建設工事に伴って発見され、市川市国府台に所在した日本考古学研究所のジェラード・グロートと篠遠喜彦が発掘調査を行いました。篠遠は主体的に出土した土器群を、前期初頭花積下層式から前葉関山式の過渡的な様相を示す中間型式として位置づけ、二ツ木式の設定を説きました。その後、長らく幻の型式と呼ばれましたが、埼玉県さいたま市深作東部遺跡群をはじめ、群馬県赤城山麓の諸遺跡、柏市駒形遺跡などの調査により、遺構に伴う良好な資料が蓄積され、二ツ木式の型式内容が整いました。花積下層式から黒浜式までの前期前半土器群は羽状縄文土器群とも呼ばれ、関山式を頂点として多種の縄文を胴部以下に回転施文し、縄目による装飾性が高いものです。花積下層式から関山式までの口縁部文様帯には、主文様構成の基本線となる主幹文様が展開し、主幹文様間に円形竹管刺突文や瘤状貼付文などの点状文様を配置します。二ツ木式の主幹文様は当初、花積下層式から継続する撚糸側面圧痕文で描出されましたが、その後ヘラ状工具により1本ずつ引いた梯子状沈線に置き換わり、さらに梯子状沈線の描線は半截竹管の内側を用いた平行沈線に置き換わり、関山式に継続します。胴部の羽状縄文は単節縄文を主に環付末端を伴う場合が多く、幅狭等間隔の横帯区画

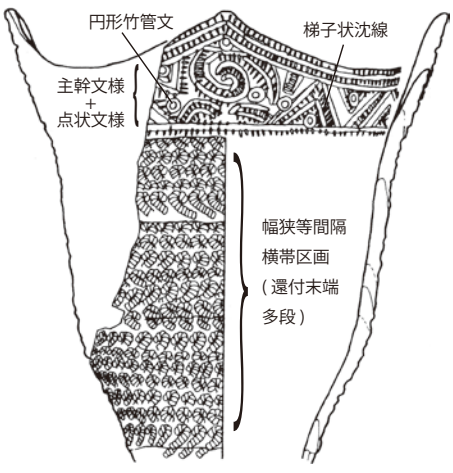


図70　二ツ木式の型式内容

法を採用するのが二ツ木式の特徴です(図70)。これに対し、次型式の関山式では幅広等間隔の横帯区画法に変わり、幅広な単位中に環付末端を多段に施し異間隔となるものも出現します。以上の内容から、当初の中間型式としての位置づけは妥当と考えられます。

(2)阿玉台式

阿玉台式は、香取市阿玉台貝塚を標式遺跡とした、主要な分布域が東関東から北関東にある中期前葉から中葉の型式です。明治27(1994)年、下村三四吉と八木奘三郎は阿玉台貝塚を発掘調査し、当時、陸平式とされた一部の土器(阿玉台式他)の把手・突起他を図化し、これらには点線(角押文)が付随する区画と一体となることや、胎土に雲母片が含まれるという特徴を指摘しています(図71)。

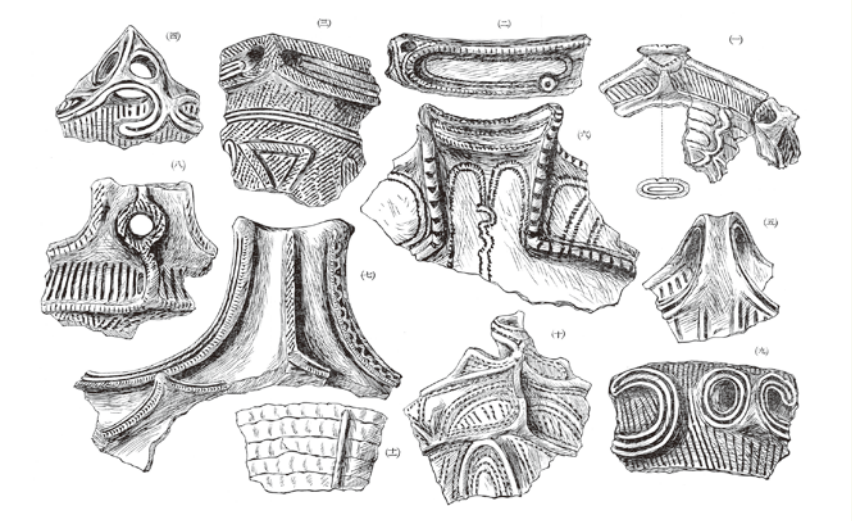


図71　阿玉台貝塚出土の縄文土器

大正13(1924)年の加曽利貝塚、大正15(1926)年の市川市姥山貝塚と神奈川県相模原市勝坂遺跡の発掘調査を経て、山内清男は昭和3(1928)年に松戸市上本郷貝塚の調査報告である「下総上本郷貝塚」を発表した際に、阿玉台式と勝坂式を前期後半の諸磯式と中期後葉から末葉の加曽利E式の間に初めて位置づけ、昭和12(1937)年の「縄紋土器型式の細別と大別」(以下「細別と大別」)では、中期の五領ヶ台式と加曽利E式の間に位置づけました。昭和10年代から昭和40年代はじめぐらいまでの諸遺跡の調査成果の蓄積により型式としての認識は進みましたが、型式の変遷をはじめ、内容を深めたのは西村正衛です。西村は地域研究のフィールドとして利根川下流域を選び、縄文早期から晩期までの貝塚を中心に組織的な発掘調査を行い、各時期で著しい成果を上げました。阿玉台式でも数か所の貝塚の調査成果から型式変遷を明らかにしましたが、その内容は第4章で触れます。なお、阿玉台貝塚は昭和43(1968)年に史跡に指定されました。

(3)加曽利E式

加曽利E式は、千葉市加曽利貝塚を標式遺跡とした中期後葉から末葉の型式です。大正13(1924)年、東京帝国大学人類学教室が行った発掘調査により北貝塚E地点から出土した土器は、研究者の間でそのように呼ばれていましたが、型式の内容を示したのは発掘調査に参加していた山内清男です(図72)。山内は「細別と大別」で既に加曽利Eと加曽利E(新)の細別があることを示していましたが、昭和15(1940)年に発刊した「日本先史土器図譜」(以下「先史土器図譜」)第Ⅸ輯において、磨消縄文のない北貝塚のE地点発見の加曽利E式と、磨消縄文のある北貝塚D地点発見の加曽利E式というように、古と新の差異があると述べました。



図72　加曽利貝塚を発掘調査する山内清男(右)

また、同時期の東北南部大木式にも加曽利E式に併行する時期に同様の差異が認められ、磨消縄文を伴わない古い部分は大木8a式及び8b式、磨消縄文を伴う新しき部分は大木9式及び10式であると述べています。加曽利E式標式資料の解説では、古い部分を「最も古い部分」と「真の加曽利E地点の土器の大多数及び下総上本郷E地点の土器」に分け、「新しい部分」には連弧文土器が伴うこと、「最も新しい部分」には注口付土器が出現することも記しましたが、標式資料の選択が不充分で各細別型式にわたっていないと結んでいます。

加曽利E式を出土する遺跡は多く、昭和35・36(1960・1961)年の岡本勇らによる神奈川県横須賀市吉井城山貝塚の調査成果をはじめ、今日まで膨大な資料とそれに対する数多の研究の蓄積により基本的には4細分され(Ⅰ式～Ⅳ式あるいは1式～4式)、キャリパー形土器の変遷観を中心に概ね理解できるようになりました。しかしながら、磨消縄文のある土器をⅡ式(2式)とするか、Ⅲ式(3式)とするかなど、4細分の基準や表記法は研究者によって異な

ります(図73)。山内も最晩年の昭和44(1969)年の「縄紋草創期の諸問題」(以下「諸問題」)の編年表で1式～4式の表記で4細分を示しましたが、詳細は不明です。なお、加曽利貝塚は平成29(2017)年に貝塚としては初めて特別史跡に指定されました。



(米田1980)をもとに(谷井ほか1982)などを参考に作成

図73　加曽利E式の細分と表記

(4)堀之内式

堀之内式は、市川市堀之内貝塚を標式遺跡とした後期前葉の型式です。堀之内貝塚は明治19(1886)年の東京人類学会報告で坪井正五郎(つぼいしょうごろう)が紹介している明治期から知られていた貝塚で、同学会が開催した明治37(1904)年の創立満20周年記念大遠足会をはじめ、多くの人々が遺物採集を行っています(図74)。大正13(1924)年、山内清男は自らの採集資料や既調査資料を基に型式設定を行いました。加曽利貝塚、姥山貝塚、上本郷貝塚の発掘調査後、昭和15(1940)年の「先史土器図譜」第Ⅵ輯で初めて内容を示しました。



図74　東京人類学会創立20周年記念
大遠足会の出土品

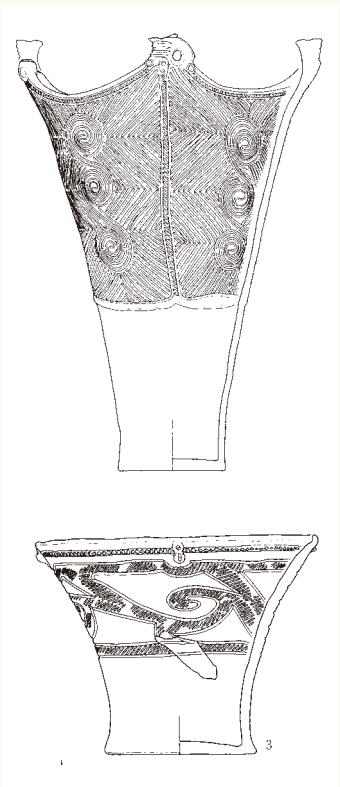


図75　堀之内貝塚出土の標式資料
(上：1式　下：2式)

それは堀之内式を「大体堀之内旧型式」と「同新型式」に細分したもので、①今日でいう西関東と東関東で地域差があること。②近似する土器を含めると東北地方から中部地方を超え広範に分布すること。③型式の年代順と土器の形態及び装飾において、加曽利E式の新しい部分と後期中葉加曽利B式の中間に当たること。以上の3点などを指摘し、この序列は昭和12(1937)年の「細別と大別」でも示されます。旧型式と新型式との差異については、器形の大小・厚み、口縁に付く突起の形態、磨消縄文の変容などを具体的に述べることで単に中間に位置するということではなく、旧新両式とも型式として別個のものであると明言しています。図75は「先史土器図譜」で解説された堀之内貝塚出土標準資料の旧型式と新型式で、現在の1式と2式に相当します。型式の特徴を一言で表すと、1式は主に縦方向の集合沈線による懸垂文構成の土器、2式は主に磨消縄文による横方向の意匠構成をとる土器といえます。堀之内式を出土する遺跡は多く、今日までの膨大な資料とそれに対する数多の研究の蓄積によって、その変遷や系統性は概ね明確になり、研究が進んでいるところです。なお、堀之内貝塚は昭和42(1967)年に史跡に指定されました。

(5)加曽利B式

加曽利B式は千葉市加曽利貝塚を標式遺跡とした後期中葉の型式で、大正13(1924)年の発掘調査により南貝塚のB地点から出土した土器を基に設定されました。経緯は山内清男によって「下総上本郷貝塚」に記載されています。

それはB地点の土器が包含されていたと考えられる貝層以下の土層に堀之内式がやや多量、加曽利E式が少量であったという層位的な所見と、安行式を加えた山内の型式学的根拠に基づき、加曽利E式、堀之内式、加曽利B式、安行式の年代的序列を認めたというもので、昭和12(1937)年の「細別と大別」では2細分されます。型式内容の公表はその後の資料の追加を待って、昭和14(1939)年の「先史土器図譜」第Ⅲ輯・第Ⅳ輯で行われました。山内は加曽利B式を「今仮に古い部分、中位の部分、新しい部分の三つに分ける」とし、図譜では「古い部分」と「中位の古さ」の内容を標式資料とともに解説しています。

「古い部分」では、①粗製の深鉢・鉢形の比率が高いこと。②精製土器は深鉢・鉢形に加え注口・皿形など器種が多様になること。③器面のミガキと体部の平行する磨消縄文が発達すること。④口縁の突起・体部紋様・底部の敷物圧痕などは堀之内新型式からの系統であること、などを指摘しています。「中位の古さ」では、①皿・浅鉢に丸底や台付が含まれること。②深鉢に大小の差があること。③平口縁が主だが大形波状口縁が増え突起が少なくなること。④体部の平行する磨消縄文が減じ斜線文による文様帯が特徴的なこと、などを指摘しています。「新しい部分」は標準資料の提示はありませんが、「中位の古さ」の解説中で、①丸底の皿や深鉢が目立つこと。②磨消縄文は主に帯状又は弧線文に用いられること。③深鉢では算盤玉形が多くなることなどを指摘し「曽谷式及び安行式前半に続く幾多の器形装飾の胚胎を見る」と結んでいます。



図76　加曽利貝塚出土の加曽利B式土器

山内は昭和44(1969)年の「諸問題」の編年表で、1式～3式の表記による3細分を示しましたが詳細は不明であり、その後の研究に混乱をきたしました。加曽利B式は遺跡が多く、出土する土器も多量であることから、この膨大な資料を基に型式の変遷や系統性などが焙り出され、研究が進んでいるところです。図76は東京帝国大学人類学教室の発掘調査で出土した加曽利B式土器の一部です。

(6)曽谷式

曽谷(そや)式は、市川市曽谷貝塚を標式遺跡とした後期後葉の型式です。山内清男は昭和12(1937)年の「細別と大別」本文中において、自ら行った曽谷貝塚の発掘調査により、加曽利B式と安行式の間に介在する内容を持った型式の全貌が明らかになったと記しています。また、昭和42(1967)年には、曽谷貝塚の調査で加曽利B式までの包含層を切って作られた、曽谷式の竪穴住居を途中まで発掘したことを記しています。

しかしながら、加曽利B式「中位の古さ」の結びで安行式前半と一括して、器形・装飾に富むという指摘に止まり型式内容は非公表だったため、曽谷式の設定に疑義が生じました。その後、平成8(1996)年に山内清男考古資料「曽谷貝塚資料」の発刊により、図77に示した標式資料が明らかになりました。

また、昭和後半以降今日まで、松戸市貝の花貝塚、市原市西広貝塚・祇園原(ぎおんばら)貝塚などの調査成果の蓄積により、山内の器形・装飾に富むという指摘は裏づけられましたが、加曽利B式と安行1式との精製土器を主とした比較検討を今後、進めていくことが課題となっています。なお、曽谷貝塚は昭和54(1979)年に史跡に指定されました。

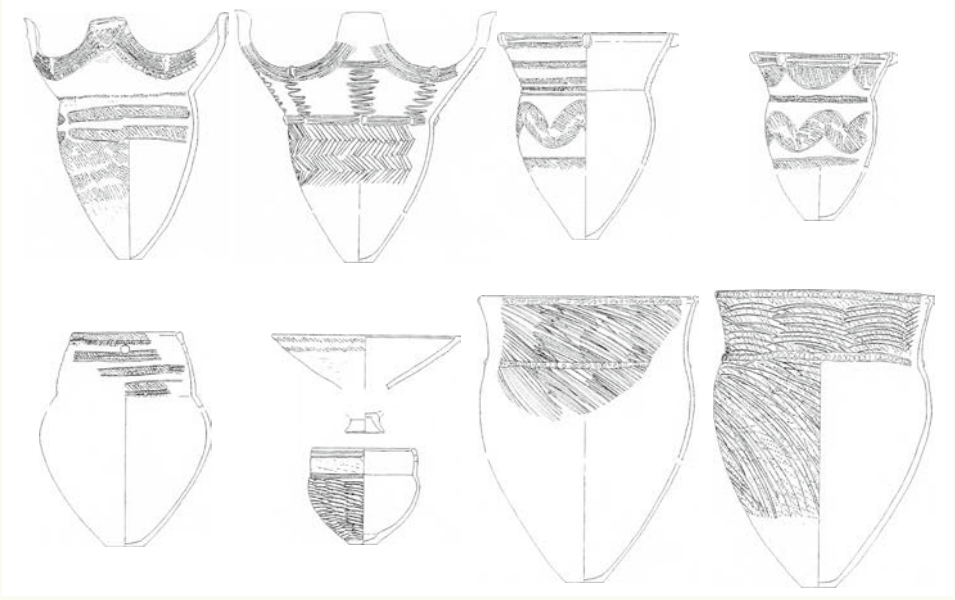


図77　曽谷貝塚出土の曽谷式主要土器

(7)荒海式

荒海式は、成田市荒海貝塚を標式遺跡とした晩期末から弥生時代前期にかけての型式です。荒海貝塚は、昭和35(1960)年から39(1964)年にかけて、西村正衛を代表とする早稲田大学の調査団によって３次にわたる発掘調査が行われました。西村は、昭和36(1961)年、第１次調査で出土した土器のうち、東北地方の大洞Ａ'式に比定される三角連繋文を主体とする第２類ｃ種、浮線網状文及び工字文を模した疑似的文様をもった沈線文で多くは平行線手法である第２類ｄ種に注目し、大洞Ａ式並行期よりものちの段階に位置づけられるこれらと粗製土器を含めて「荒海式」と命名し、晩期最終末に位置づけました。

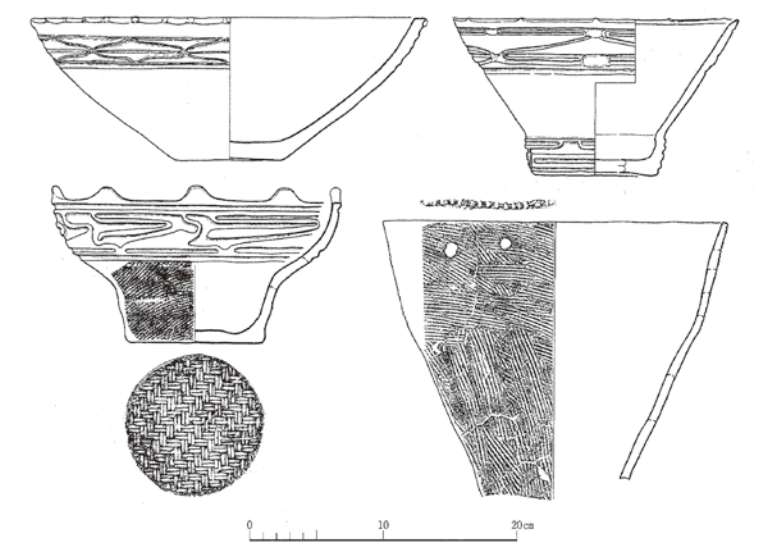


図78　荒海貝塚Ａ地点から出土した荒海式土器

鈴木正博は昭和56(1981)年、荒海貝塚Ａ地点の土器を検討し、荒海１式から４式に細分しました。荒海１式は雑書文の段階で大洞Ａ2式並行、荒海２式は沈線文様が３本を１単位とする段階で大洞Ａ'１式並行、荒海３式は２本を１単位とする段階で大洞Ａ'２式並行、荒海４式は単線に統一される段階としています。

平成９(1997)年、石橋宏克と渡辺修一は、千葉県史編さんに伴う学術調査として荒海貝塚の近傍の低地に所在する荒海川表遺跡の発掘調査を行いました。石橋らは平成13(2001)年、同遺跡の報告において、10号竪穴建物跡と17号遺構の出土資料をもとに荒海３式の古・新の細分を行うとともに、初めての遺構一括資料の抽出に成功して、荒海式の単一時期の土器組成を明らかにしました。その後、渡辺は前後の荒海２式、荒海４式の細分を行いますが、平成19(2007)年、荒海２式と荒海３式の間に浮線文系浅鉢の消滅と粗製大型壺の出現という２つの大きな画期を指摘し、晩期の土器組成の変革の終了と弥生土器の成立をここに求めました。

他地域においても、荒海３式に並行する時期は中部高地の氷Ⅱ式や北関東の沖式など最初の弥生土器とされる土器群が位置づけられ、山梨県宮ノ前遺跡で水田が、神奈川県中屋敷遺跡で陸耕を主体とする農耕が確認されています。今後は、荒海式期の生業をより明らかにすることが大きな課題となるでしょう。

コラム２　放射性炭素(^{14}C)年代測定法

文字による記録のない先史考古学では、年代決定それ自体が重要な基礎研究となります。縄文土器の研究では相対年代と数値年代が主に使われています。相対年代は出土した土器の特徴をもとに型式を設定し、出土層位の上下関係や文様の変化、遺構の切り合いなどに基づいて、新旧関係を決定します。考古学の研究が始まって以来、この手法によって土器の序列(編年)が定められてきました。数値年代は理化学的分析等によって得られる年代で、放射性炭素(^{14}C)年代測定法は、土器に付着している炭化物(煤や吹きこぼれ、おこげ)から土器が使われていた年代を測定します。

おこげなどの炭化物は炭素を含む化合物です。炭素には質量数が12、13、14の同位元素が天然に存在します。このうち、炭素12や炭素13は変化しませんが、炭素14は一定の速度で崩壊し、約5,730年で半減します。この特性を科学的に分析し、土器の年代を決定していきます。

考古学研究の始まり以来、数多の研究者によって精密な土器編年が組み上げられてきました。そこに理化学的測定によって得られた数値年代が付与されることで、海外との比較も可能となるのです。


写真３　煤の付着した土器(横芝光町高谷川低地遺跡)

第４章　土器型式の移り変わり

土器型式は年代観や地域性の指標になるなど、縄文時代研究の根底を支えています。型式は先行研究の検討や資料の蓄積に伴い見直されたり、細分されたりします。型式学では文様・器形などの相同、それらの系統的な変化を検討しますが、貝層や遺構内でまとまって出土した土器は、併せてそれらの層位や一括性を検討して、先後関係を決めます。今回は茅山式と阿玉台式の型式変遷について紹介します。

(1)茅山式

茅山式は、神奈川県横須賀市茅山貝塚を標式遺跡として設定された早期後半条痕文土器群の型式で、条痕文は主に放射肋のある貝殻を器面に引きずって施す文様を特徴とします。茅山貝塚の存在は、既に明治30(1897)年頃には知られていましたが、年代観は不明でした。昭和4・5(1929・1930)年、山内清男によって条痕文土器群は子母口式→茅山式という序列が与えられました。茅山式の設定に際しては、三浦半島を研究フィールドとした赤星直忠が採集した茅山貝塚の土器が大きく関与しており、赤星も昭和5(1930)年にその内容を報告しています。赤星は茅山貝塚出土の茅山式は細分される可能性が高いと考えていたため、岡本勇らと昭和29(1954)年に発掘調査を行いました。そして、相前後して対岸に位置する吉井城山貝塚をはじめ、三浦半島周辺に所在する野島貝塚、鵜ガ島台遺跡など(図79)の調査研究を行い、岡本は型式的・層位的所見により、茅山式は野島式→鵜ガ島台式→茅山下層式→茅山上層式の順に変遷することを明らかにしました。今日の資料の増加に伴う研究の進展により、系譜が辿れる資料が抽出されているので、展示した土器の文様帯により変遷を説明します(図80)。なお、文様は隆起線文、沈線文、押引文、刺突文などが用いられます。

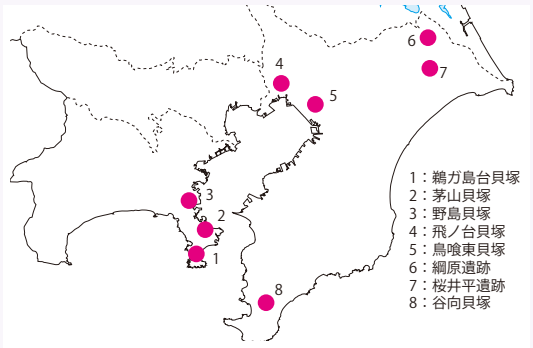


図79　茅山式の標式遺跡と千葉県の展示遺跡

１は野島式古段階で、１帯の文様帯を横位区画文・縦位区画文で区画し、内部に「単角付斜行文」と呼ぶ意匠区画文を充填する「区画文間充填手法」が認められます。２は野島式新段階で、前段階からの「区画文間充填手法」は維持・発展し、文様帯は縦位区画文に貫かれた上下２帯となります。また、区画文上の局所に複数１単位の刻みが加えられています。３は鵜ガ島台式古段階で、前段階で貫通していた縦位区画文は上下の文様帯間で分断されます。２で局所的だった刻みは区画文上の刺突文に変化します。４は鵜ガ島台式新段階で、意匠区画文の過密化により、充填文の施文範囲が狭まります。また、意匠文の曲線化により横位・縦位の区画文からの遊離を促進し、区画文としての機能が希薄化します。５は茅山下層式で、４で起こった「区画文間充填手法」の希薄化が進みつつも辛うじて保たれていましたが、６の茅山上層式では姿を消し、区画内に簡素な曲線モチーフのみが受け継がれます。このように広義の茅山式の変遷は、野島式から鵜ガ島台式にかけて文様が複雑化し、その後、茅山下層式から茅山上層式に向かい簡素化する傾向が見て取れます。

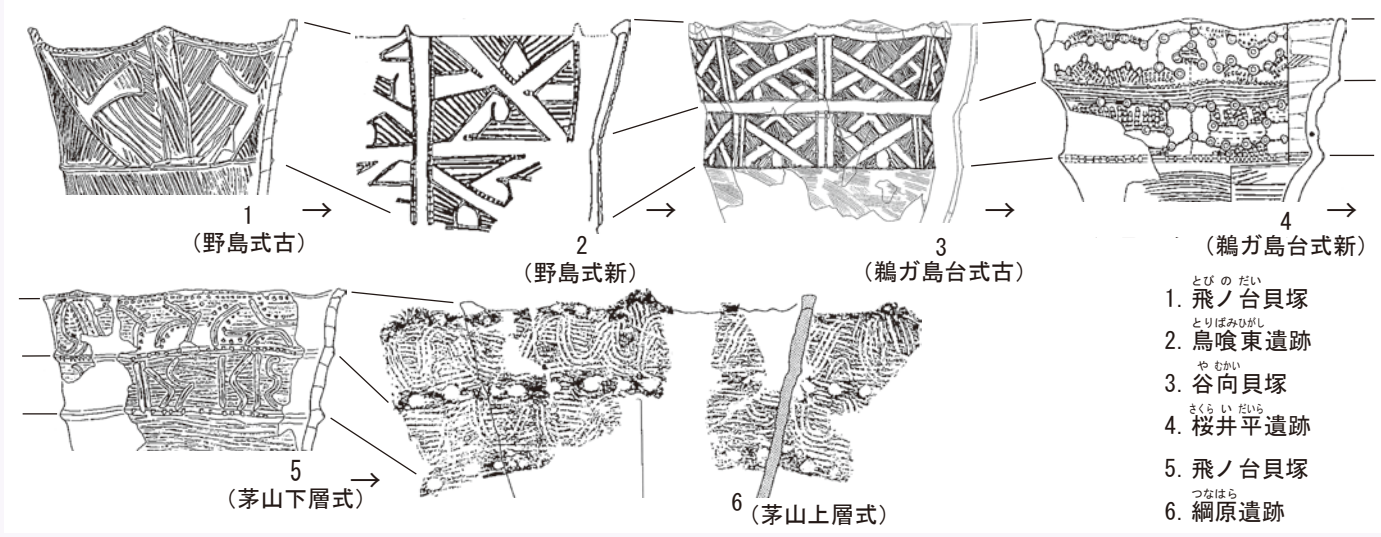


図80　茅山式の変遷

(2)阿玉台式

既述したように阿玉台式の研究は、西村正衛による利根川下流域の貝塚を中心とした調査成果を基に進展しました。西村は昭和25(1950)年から昭和43(1968)年にかけて、千葉県佐原市・小見川町・山田町(現香取市)に所在する白井雷・通路(現白井大宮台)貝塚、阿玉台貝塚、木ノ内明神貝塚、向油田貝塚、三郎作貝塚、内野貝塚と、茨城県江戸崎町(現稲敷市)に所在する村田貝塚を断続的に発掘調査しました(図81)。そして、層位関係や出土量に多寡がある事実を踏まえ、これらの貝塚から出土した五領ヶ台式終末から阿玉台式終末までの土器群を型式学的に細分しました。

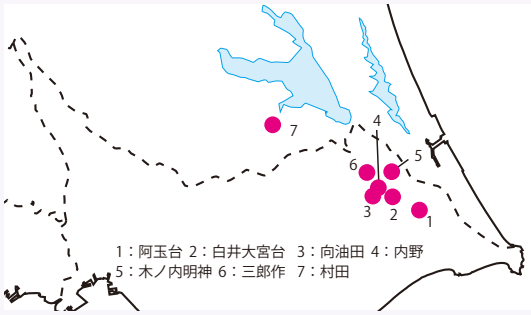


図81　利根川下流域の阿玉台式期の貝塚

阿玉台式の細分は、隆起線に沿う角押文(阿玉台式に固有な結節沈線文の名称)の変化、口縁部区画を作り出す隆起線の断面形状の変化、区画文の幅の差や発達の度合い、胴部の輪積修正痕の消長などを指標に型式学的な検討が加えられたもので、Ⅰa式・Ⅰb式・Ⅱ式・Ⅲ式・Ⅳ式に5細分されており、今日でも一般的です。口縁部は波状口縁と平口縁のものがあります。今回展示した土器を主に、図82で型式変遷を説明します。

図82-1は阿玉台Ⅰa式、2・3は阿玉台Ⅰb式、4・5は阿玉台Ⅱ式で、2以外は波状口縁です。隆起線に沿う角押文は1～3は単列、4・5は複列となり、区画内への角押文の充填に疎密が認められます。口縁部区画を作り出す隆起線の断面形状は、いずれも断面三角形で低平なつくりです。口縁部区画は1では波頂部から垂下する隆起線がそのままクランク状に折れて懸垂文となり、区画が閉じない箇所があります。2～5では口縁部・頸部・胴部の横帯区画が鮮明になり、口縁部区画がしっかりしています。次に口縁部区画接点にある突起・把手に注目します。1は尖った波頂部の片側に2つの刻みを加え、波状口縁が左右非対称であることを表現していますが、突起・把手は未発達です。2～5は扇を広げたり、半開きにしたような扇状把手が発達します。隆起線も次第に立体的になり、5は板状の山形把手になります。頸部は総じて装飾性に乏しく、角押文が波状に施される程度です。胴部以下には隆起線が懸垂文として直曲線的に垂下します。4は甕形の器形で、胴部上半に区画文や大形の貼付文が作られるなど、阿玉台式としては装飾性が高いものです。1・2の胴部には土器製作時の輪積みの修正痕が認められますが、3では指の腹で凸凹にしたヒダ状文に、5では連続爪形文に変化しています。

図82-6は阿玉台Ⅲ式、7は阿玉台Ⅳ式で、隆起線には角押文に替わり、Ⅲ式には幅広爪形文、Ⅳ式には沈線文が沿います。隆起線は丸みを帯びた断面カマボコ形とより立体的になり、阿玉台Ⅰb式以来の口縁部・頸部・胴部の横帯区画は維持され、山形把手は大きく突出して頭勝ちになります。口縁部区画の接点にあった扇状把手は渦巻状の隆起線に、区画内の充填は角押文から沈線文に替わります。頸部は無文の場合が多く、胴部以下の懸垂文は大きく直曲線的に垂下します。7の地文や隆起線上には縄文が施されます。以上のように阿玉台式は五領ヶ台式と加曽利E式の間で変遷します。

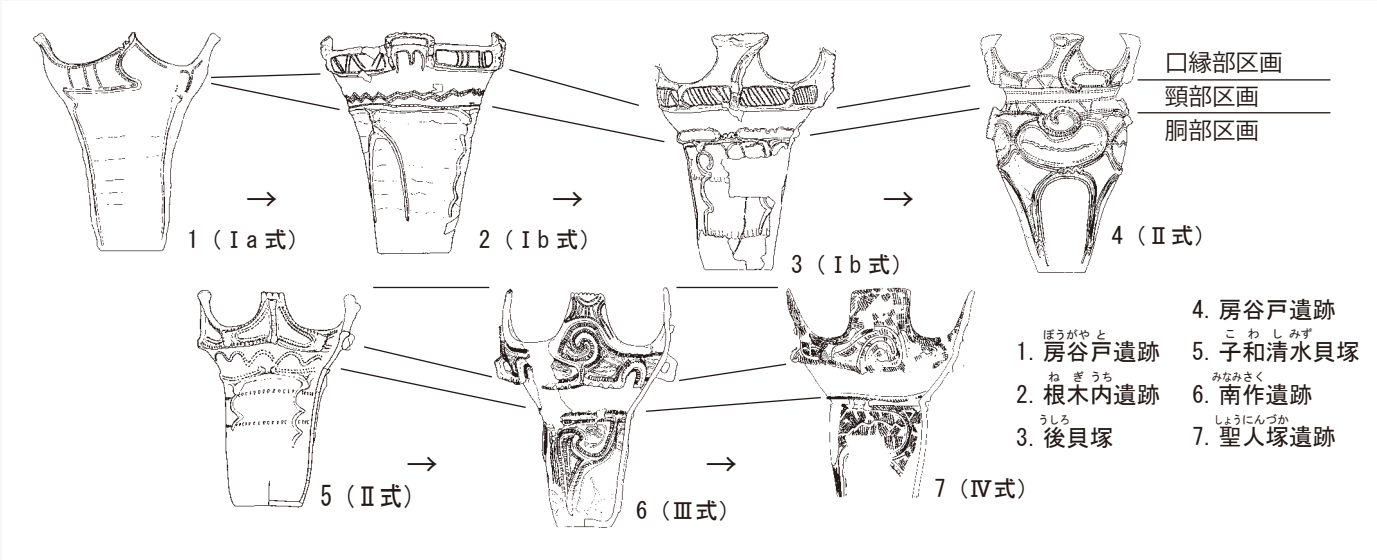


図82　阿玉台式の変遷

第5章　土器型式から見る地域性と文化の広がり

縄文時代の各時期において、千葉県の遺跡から遠隔地の土器が出土することがあります。縄文土器の全国編年は細密に整備されており、遠隔地の土器が出土した場合はそれと判断できます。遠隔地の土器が出土する理由は、様々なケースが考えられます。また、複数の土器型式の分布図が接する地域では、一つの遺跡で地元の土器とは異なる土器（異系統土器・非在地系土器）が地元の土器（在地系土器）と共伴したり、両者の文様が同一個体に共存した土器が出土したりすることがあります。ここでは土器型式の地域間交流の事例を示し、文化の広がりや社会をどのように見ることができるのか、ほんの一端ですが紹介します。

（1）遠隔地の土器

搬入土器・模倣土器・折衷土器　遠隔地の土器が出土する理由を素直に考えれば、その土器が他地域から搬入されたということです。しかし、事はそれほど簡単ではなく、次のように様々なケースが想定されます。先ず想定されるのは、他の地域で作られた土器を搬入したケースで、運び手は他の地域の人あるいはこちらのムラの人の両方が考えられます。次に想定されるのは、こちらのムラの人が他地域の土器の作り方を知っていて、こちらで製作したケースと、他地域出身の人がこちらのムラに住んでいて、こちらで製作したケースです。つまり、遠隔地の土器でありながら物理的には運ばれず、人を介して土器型式の情報が運ばれたケースです。また、他地域の土器の文様が地元の土器の文様に取り入れられるなど、いわゆる折衷土器と呼ばれる遠隔地あるいは隣接地の土器型式と融合したものもあります。

土器の顔つきで遠隔地の土器と判断しても、先にお話ししたどのケースに該当するのか結論付けるのは、難しいです。文様の施文手法や施文順序など、その標準的な土器型式の決め事と比較する考古学的な方法で見極めたり、土器の胎土などの理化学的な分析を行ったりして、判別できることがあります。

千葉県内の事例　千葉県内から出土した遠隔地の土器は縄文時代早期から晩期までありますが、ここでは展示資料に選定した中期から晩期の土器を幾つか紹介します。

中期　図83は君津市練木（ねりき）遺跡出土の中期前葉の土器です。この土器は口径11㎝、器高13.5㎝と小形のキャリパー形土器で、「二つの「顔」を持った土器」という論文名で考察された折衷土器です（大村裕2002）。土器は口縁部・頸部・胴部の3段の区画にそれぞれ文様が施されています。胴部は勝坂Ⅱ式（新道（あらみち）式）のパネル文が全周しますが、口縁部と頸部に「二つの顔」と言われる理由があります。縦に分割されたいわば半身の2段は、それぞれの段の文様帯で、半周ずつ甲信地方から西関東の勝坂Ⅱ式と北陸地方の新崎（にんざき）Ⅱ式の文様が巡りますが、縦割りしたA面とB面で上下の文様が入れ替わるという、極めて希な土器です。さらに施文手法を復元し、練木遺跡の土器は別型式の文様による装飾を一つの個体に取り込みながらも、勝坂Ⅱ式の鋸歯状文を描出する手法で新崎Ⅱ式の蓮華状文（れんげじょうもん）も描出していることを明らかにしました。

同様の施文手法がある例を調べた結果、多摩地域中央部に類例があり、ここに製作地あるいは製作者集団を推定しています。蛍光X線による胎土分析も行われましたが、分析データは考古学的方法による推定とも、地元の土器の胎土とも調和しない結果となったことから（建石徹2002）、多摩地域中央部出身の製作者が練木のムラではない別の場所で製作した可能性を想定しています。このように折衷土器でありながら搬入土器でもあるこの土器については、地域間交流の背景は掴めていません。

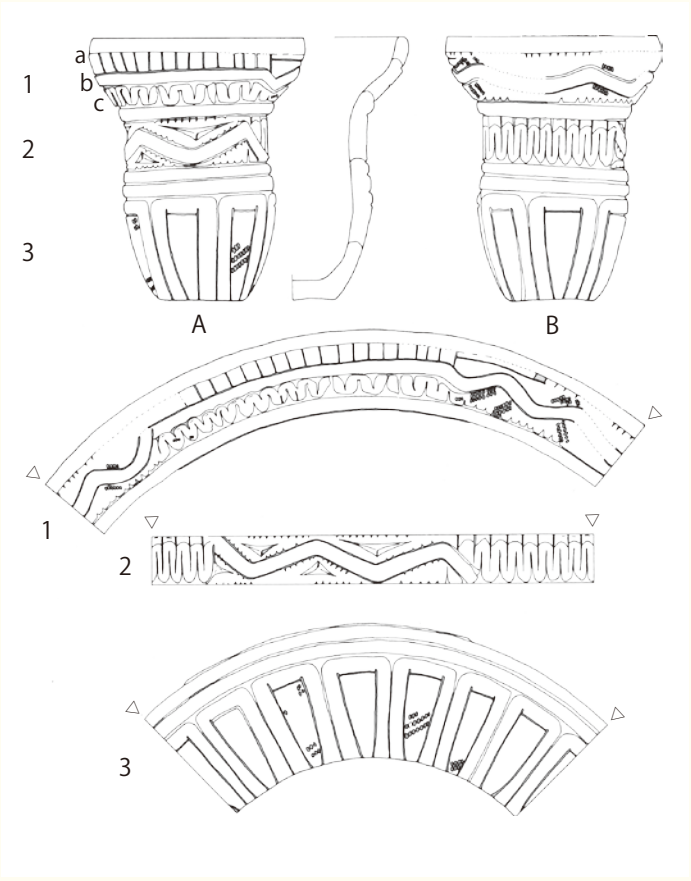


図83　二つの「顔」を持った土器（練木遺跡）

図84は千葉市有吉北貝塚出土の中期中葉の土器で、新潟県長岡市馬高遺跡を標式遺跡とする火炎土器が変容した火炎系土器と考えられます。火炎土器は寸詰まりの器形で縄文は施されず、隆起線により燃え盛る炎をはじめ曲線的なイメージを立体化した造形に優れた土器です。時期的には中期中葉から後葉前半と極めて短期で、地域的には信濃川流域を中心とした新潟県全域で、時期変遷の中で中心地が少しずつ移ろいます。火炎系土器の主要な分布は福島県の会津地方と中通り地方、北関東地方の栃木県、長野県の東信地方ですが、火炎土器の決め事から逸脱する亜流と考えられます。有吉北貝塚例は器形の決め事を守っていますが、隆起線による文様や造形は緩んでおり、何よりも地文に縄文が施された点からも亜流であることは間違いありません。縄文の施文からおそらく大木式分布圏である福島県系統の火炎系土器と思われますが、やはり地域間交流の背景は掴めていません。

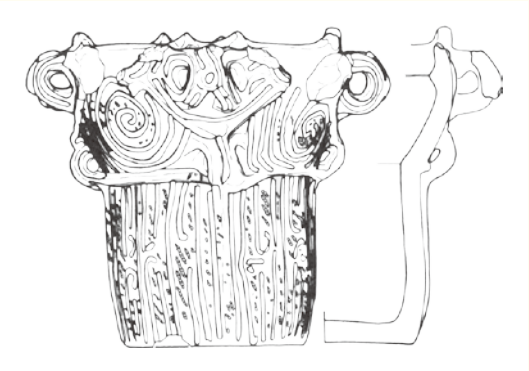


図84　火炎系土器（有吉北貝塚）

図85-1は木更津市伊豆山台遺跡、同-2は銚子市粟島台遺跡出土の中期後葉曽利式です。曽利式は長野県諏訪郡富士見町曽利遺跡を標式遺跡とし、甲信地方から西関東がこの型式の中心的な分布域となります。時期的には末葉まで続き、加曽利Ｅ式とほぼ併行します。器形は括れた頸部から口縁部が大きく開き、胴部は若干張った後に底部に続くメリハリのあるものです。口縁部には半截竹管の内側を用いた平行する半隆起線（沈線）で、弧を連続的に重ねた重弧文や斜位に連ねた斜行文を施します。１と２を比較してみると、１は器形にメリハリがあり、蛇行隆起線などによる立体的な文様の加飾が著しく、中心地の曽利式に近いです。２は器形のメリハリが緩み、括れ部には隆起線ではなく緩んだ連弧文土器の刺突文に置き換わっています。両者には若干、時期差があるのですが、中心地域からの距離の差を反映しているのかもしれません。なお、両遺跡では別個体（破片資料）になりますが、蛍光Ｘ線による胎土分析が行われており、分析資料の範囲では加曽利Ｅ式と曽利式に顕著な差は見られず、ともに地元の粘土で製作された可能性が高いという結果でした。もしかしたら、伊豆山台のムラの土器の作り手と粟島台のムラの作り手では、曽利式に関する情報量に差があったのかもしれません。

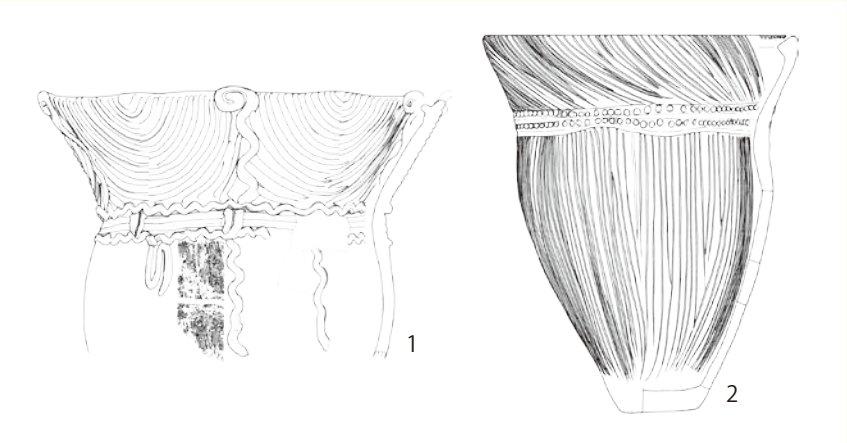


図85　曽利式土器（１：伊豆山台遺跡・２粟島台遺跡）

図86は市原市西広貝塚出土の中期末葉から後期前葉の土器です。４単位の波状口縁を呈する浅鉢で、対向位置で大小２単位の波状となります。口縁部から胴部上半には、幅広で明瞭な沈線によって幾何学的な文様が描出されており、沈線内を除いたこの範囲は水銀朱によって赤彩されています。東日本では栃木県小山市寺野東遺跡から出土した深鉢の口縁部に、近似した文様が描出された例があるのみです。これらは九州地方から中国地方西辺に分布域を持つ阿高式に類似点が求められます。仮にこのような遠隔地から搬入された土器であるならば、地域間交流はかなりダイナミックであったと思われますが、その実体はよくわかっていません。



図86　阿高式土器（西広貝塚）

後期・晩期　後期前葉から晩期中葉までの縄文社会は、様々な考古学的成果から広域なネットワーク社会を形成していたと考えられています。地域ごとの特産品、地域限定の有用な資源などを共同利用するシステムを作り、持続可能な社会を築き上げていたのです。土器型式でいえば堀之内２式をその前段階として、関東・中部地方を中心地としながらも列島で大きく広域化する後期中葉加曽利Ｂ式の分布圏や、東北地方を中心地としながらも列島を南下して広域

な分布圏を形成する晩期大洞式など、それらの型式圏が広域ネットワーク社会を物語っています。このように概ね東高西低の様相ですが、中には関西系など西日本の縄文土器が東日本各地の遺跡から少量出土したり、特定の器種が出土したりすることがあります。

図87は袖ケ浦市山野貝塚から出土した晩期前葉の浅鉢2点で、奈良県橿原市橿原遺跡をはじめ、東海地方から関西地方を中心地とする橿原式文様を有する土器に類似します。この土器は東北・関東地方などに類例が認められるだけではなく、橿原遺跡から東北地方大洞系、関東地方安行系をはじめ、東北地方以南の各地方の土器型式が出土していることから、双方向の人やモノの動きを垣間見ることができます。

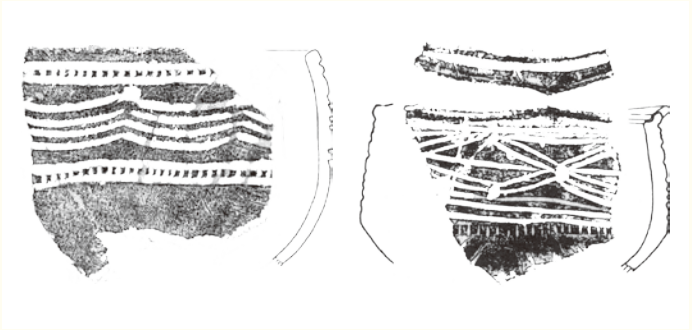


図87　橿原式文様の土器（山野貝塚）

堀之内2式を先駆けとして加曽利B式になると器種のバリエーションが大きく増え、以降に引き継がれていきます。その中で器種によっては特定の地域で作られた土器が広く流通することがあります。関東地方の注口土器について、後期前葉後半から後期中葉前半（Ⅰ期）、後期中葉後半（Ⅱ期前半・Ⅱ期後半）、後期後葉（Ⅲ期）の4期に分け、それらの様相と特徴を示したうえで、注口土器が動く理由が考察されています（秋田かな子2021）。全体的に示唆に富む内容ですが、独自性のある注口土器の製作状況と注口土器の各時期の動きに絞って内容を紹介します。Ⅰ期の主要な製作地は関東地方の神奈川県西部と群馬県、加えて中部地方というように偏ります。製作地からの移出は東北地方から関西地方までと波及力が高く、独自に製作しない地域では模倣・変容品も認められます。Ⅱ期前半では関東地方での製作は途絶え、東北地方で製作されたものが関東地方に数多く移入されます。Ⅱ期後半では東北地方の移入品主体が継続する中に少数、近畿地方製作の移入品が加わります。Ⅲ期では東北地方製作品の移入が継続するものの、新たに千葉県を含む東関東と北関東で独自の注口土器が製作され、拠点集落から多く出土します。また、西関東では近畿地方製作の移入品の波及が高まるとしています。

注口土器は特別な液体を酌み交わす非日常的な器種で、異なる地域間の人間関係を取り結ぶ社会的機能が注口土器を介して共有化されたとし、その価値観に基づき独自品の製作とその移入、模倣・変容が行われたとしました。そして、広域交流を促進する道具であったことが、注口土器が動く要因と結論づけています。図88は佐倉市井野長割遺跡出土の注口土器で、兵庫県神戸市元住吉山遺跡を標式遺跡とする元住吉山Ⅰ式のもので、関東地方の加曽利B3式に併行します。この土器は近畿地方製作の移入品の可能性が高く、Ⅱ期後半の様相を物語る資料となります。



図88　元住吉山Ⅰ式の注口土器（井野長割遺跡）

（2）中期前葉期から中葉期における接触地域の土器群

― 阿玉台式と七郎内Ⅱ群土器・宮後タイプ ―

接触地域の土器型式　千葉県は東関東地域に属しますが、この地域の中期前葉期から中葉期は、栃木県と茨城県の南部とともに阿玉台式の主要な分布圏となります。また、東関東地域は甲信地域・西関東地域を主要な分布圏とする勝坂式と接触し、北関東地域を介して大木式の分布圏とも接触する地域であることから、阿玉台式とそれぞれの型式が共伴する事例があったり、それぞれの型式が阿玉台式に影響を与えたりと、地域間の交流の様子を認めることができます。下総考古学研究会による房総半島の大木諸型式の研究（下総考古学研究会2011）はありますが、千葉県では大木式との関係性より、事例の多い阿玉台式と勝坂式の関係性を中心とした研究が進められてきました。ところが最近になって、大木式分布圏との接触の様子が窺える資料も増えてきました。

柏北部東遺跡群の様相　柏北部東地区の発掘調査により、それまで類例の乏しかった中期前葉期から後葉期を主体とする複数の拠点集落が明らかになりました。大松遺跡と小山台遺跡では、阿玉台式と勝坂式に関する研究に厚みを増す資料が追加され、併せて大木式系統の土器分布圏との接触を示す資料も出土しました。小山台遺跡では千葉県で初

めて、阿玉台式と対比できる大木7b式系の七郎内Ⅱ群土器の個体資料が出土しました。

七郎内Ⅱ群土器　七郎内Ⅱ群土器は、福島県中通り地方の石川郡石川町七郎内C遺跡の発掘調査で出土し、Ⅱ群に分類された土器を基に、塚本師也が大木7b式の一系統として設定したものです。主要な器種である深鉢の特徴を挙げると、主たる文様は縄文地に隆起線や有節沈線で描かれます。口縁部には区画文を形成し、隆帯を配したり、突起などが付いたりします。頸部には渦巻文や弧線文が描かれ、胴部には4条の隆起線文が垂下し、その間は有節沈線による弧線文などが描かれます。七郎内Ⅱ群土器は、阿玉台Ⅰa式からⅣ式までの変遷とほぼ呼応した形で変遷します。図89は茨城県常陸大宮市坪井上遺跡出土の土器です。器高24㎝とやや小ぶりな深鉢ですが、七郎内Ⅱ群土器の特徴をよく表しています。



図89　七郎内Ⅱ群土器（坪井上遺跡）

宮後タイプ　茨城県東茨城郡茨城町宮後遺跡から出土した土器を基に、塚本が大木7b式の一系統として設定したものです。元は茨城県日立市諏訪遺跡の調査報告書で「スワタイプ」と仮称された土器で、塚本が研究史上の混乱を避けるため、標準的な土器が出土した宮後遺跡の土器により仮称したものです。主要な器種である深鉢の特徴を挙げると、主たる文様は七郎内Ⅱ群土器と同様、縄文地に隆起線や有節沈線で描かれます。口縁部に区画文を形成し、突起などが付くのも同様です。異なるのは口縁端部に交互刺突文が巡る点、頸部は素文になる点、胴部の懸垂文間に描かれる対弧状やX字状の文様が沈線で描かれる点です。宮後タイプは、阿玉台Ⅰb式の新段階からⅣ式までの変遷とほぼ呼応した形で変遷します。図90は宮後遺跡出土の土器です。宮後タイプの特徴をよく表していますが、懸垂文間の対弧文は沈線と有節沈線の両方で描かれています。

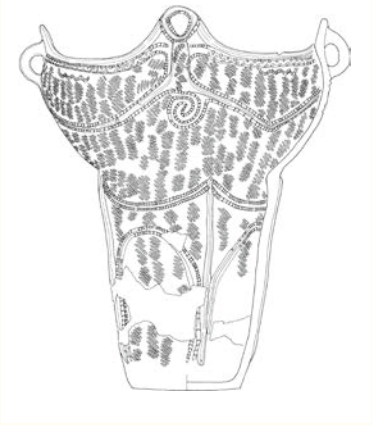


図90　宮後タイプ（宮後遺跡）

小山台遺跡の事例　小山台遺跡では複数の七郎内Ⅱ群土器が出土しています。このうち、(36)SK136では阿玉台式、勝坂式、大木式系などの地域間交流を示す土器が、覆土中層からまとまって出土しています（図91）。1はカマボコ形隆起線に爪形文が付随する阿玉台Ⅲ式、2も同式の素文の例です。3は中峠5次2住型深鉢（下総考古学研究会2006）の一種で、口縁部下端区画がない形で3単位の大型横S字状文が付いており、福島県の大木式系統が栃木県那須地方を下って変容したと理解されます。また、阿玉台Ⅲ式の爪形文が付随することから、異系統文様の同一個体共存（以下、キメラ）の土器と考えられます。4は阿玉台式、勝坂式、七郎内Ⅱ群土器のキメラ土器です。2本1単位で垂下する波状沈線文は阿玉台式、刻み目の付く隆起線で3本指をはじめとする人体表現は勝坂式、縄文地と隆起線に伴う有節沈線は七郎内Ⅱ群土器というように、異系統文様が同一個体に共存します。肥厚する口縁部区画内に充填される円形竹管刺突文は阿玉台式あるいは勝坂式の文様です。5は不明な点が多いながらも、勝坂式と大木式系が同一個体に共存すると思われる土器です。これらから、異系統土器の文様が小山台遺跡において各々認識され、同一個体の中で融合したキメラとして表現されたと理解できます。

小山台遺跡ではその他に七郎内Ⅱ群土器の個体資料が４点出土していますが、うち２点を紹介し

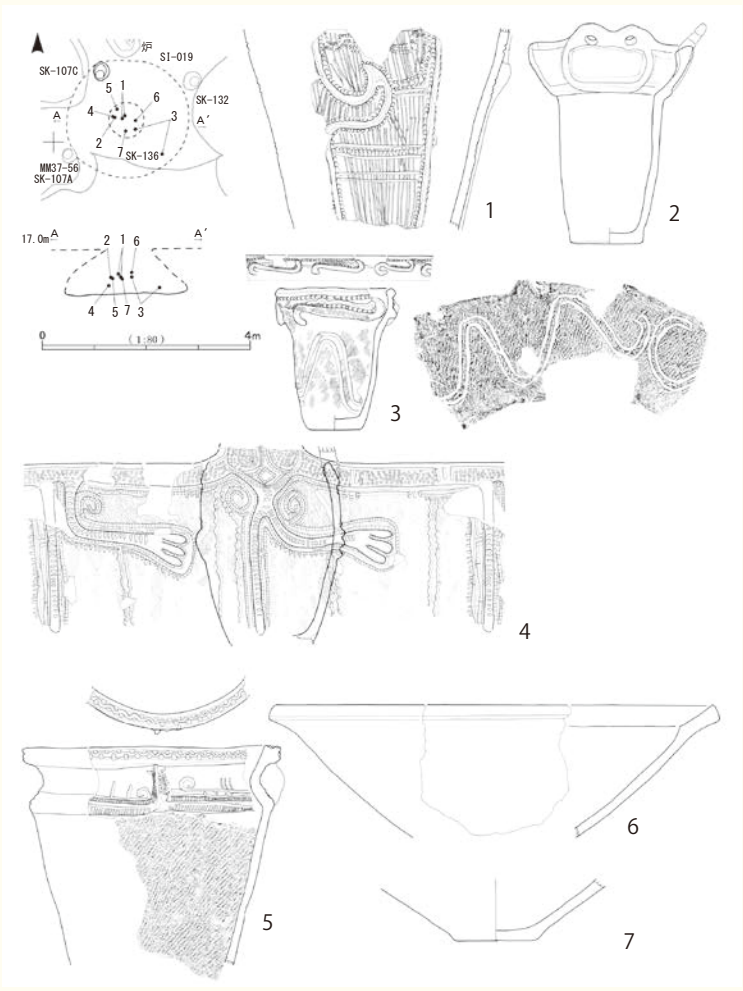


図91　(36) SK136出土遺跡（小山台遺跡）

ます。図92は(55B) SI032から素文の阿玉台式に伴って出土した、頸部が球形を呈す深鉢です。4単位の波状口縁で、緩やかな波状と大型の突起が付く波状が対向しますが、突起からは押圧縄文で区画される口縁部下端に橋状把手が架けられます。なお、突起には有節沈線が付随する狭小な区画文が伴います。頸部には細い隆起線による不完全な枠状区画が形成され、複列の有節沈線がこれに付随しています。胴部下半から欠損しますが、頸部と胴部の境に有節沈線を2条巡らせ、胴部には有節沈線による文様が描かれています。この土器は茨城県日立大宮市滝ノ上遺跡SK102 (2)で、阿玉台Ⅲ式に伴い出土した七郎内Ⅱ群土器に近似しています(図93)。図94は(87) SK009Aから福島県の大木式系土器に伴って出土した鉢で、口縁部に2単位の立体的な突起が対向して付きます。胴部には有節沈線によって描かれた渦巻き文が横位に連繋しています。この鉢は阿玉台Ⅳ式に伴って出土した芝山町大滝遺跡のD-013（土坑）(図95)、茨城県日立大宮市滝ノ上遺跡第55号竪穴建物跡(図96)に近似することから、同時期と考えられます。



図92　(55B) SI032出土土器
(小山台遺跡)

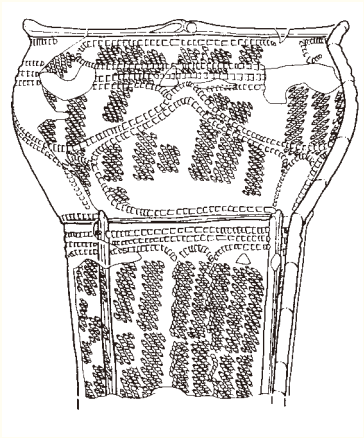


図93　(SK102 (2))出土土器
(滝ノ上遺跡)

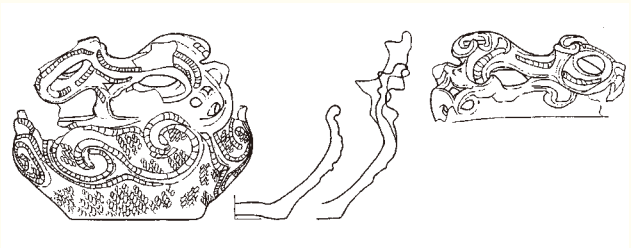


図94　(87) SK009A出土土器(小山台遺跡)



図95　D013出土土器
(大滝遺跡)

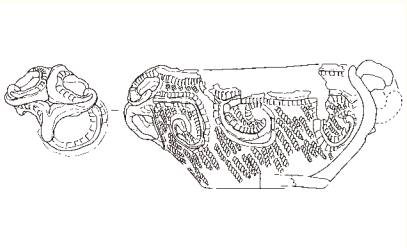


図96　第55号竪穴建物跡出土土器
(滝ノ上遺跡)

墨古沢遺跡の事例　酒々井町墨古沢遺跡では破片資料3点と、158号住居跡の床面直上から個体資料が出土しています(図97)。この土器は基本4単位の緩やかな波状口縁で、内面に動物意匠が付く突起を有する波状縁と口縁端部の小区画文が対向し、残りは小波状縁が対向します。突起から頸部上端には橋状把手が架けられます。口縁部には狭小な有節沈線による区画文が形成され、頸部以下は地文に縄文が施されます。口縁部と頸部、頸部と胴部の境界には沈線文と波状沈線文を複数巡らせて区画します。胴部には縄文が施される隆起線文が4単位垂下し、その懸垂文間には変形したX字状や曲線的図形の文様が沈線で描かれます。これらの特徴からこの土器は、七郎内Ⅱ群土器と宮後タイプの特徴を併せ持った土器ということになり、大木式系のそれぞれの情報が、主要な分布圏からは離れた墨古沢遺跡で融合されたと考えることができるかもしれません。図98は常陸大宮市諏訪台遺跡第8号土坑から出土した七郎内Ⅱ群土器です。口縁部内面に動物意匠が付く中心地の事例として紹介しておきます。

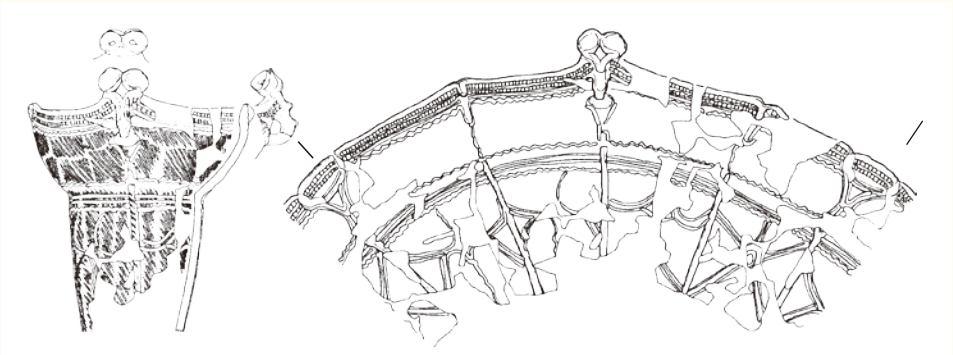


図97　158号住居跡出土土器(墨古沢遺跡)



図98　第8号土坑出土土器(諏訪台遺跡)

大根磯花遺跡の事例　香取市大根磯花遺跡では、個体資料が1点出土しています(図99)。この土器は口縁端部に交互刺突文が巡らされ、以下には地文縄文が施されます。交互刺突文以下の口縁部は単列と複列の有節沈線によって上下端を区画し、下端は隆起線で頸部と区画します。欠損していますが、交互刺突文と隆起線の間には橋状突起が架けられたと思われます。頸部は素文で、縄文地も部分的に磨り消されており、胴部との境は有節沈線で区画されています。なお、これらの有節沈線は部分的に押し引かれておらず、沈線となっています。胴部には隆起線による、おそらく4単位の懸垂文が垂下し、懸垂文間には沈線によるX字状などの文様が沈線で描かれると推察されます。以上の特徴からこの土器は宮後タイプと考えられます。

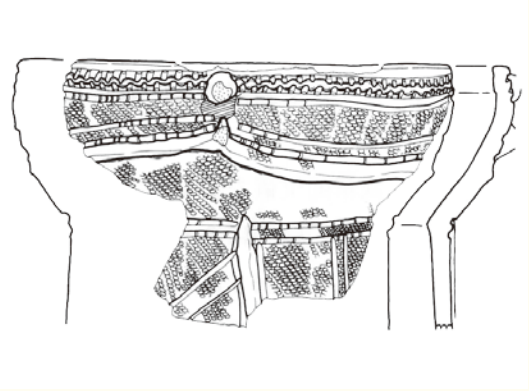


図99　宮後タイプ(大根磯花遺跡)

七郎内Ⅱ群土器の分布　図100は、塚本師也が現在までにプロットした、福島県・栃木県・茨城県を主要な対象とした七郎内Ⅱ群土器出土遺跡の分布図を基に分布圏を結んだ図に、下総考古学研究会が『房総半島および周辺地域における大木諸型式(7b式～8b式)の研究』で作成した、千葉県の大木式系土器出土遺跡の分布図のうち、七郎内Ⅱ群土器出土遺跡を抽出したものと、今回の展示研究で確認した遺跡の位置を加えた図になります。

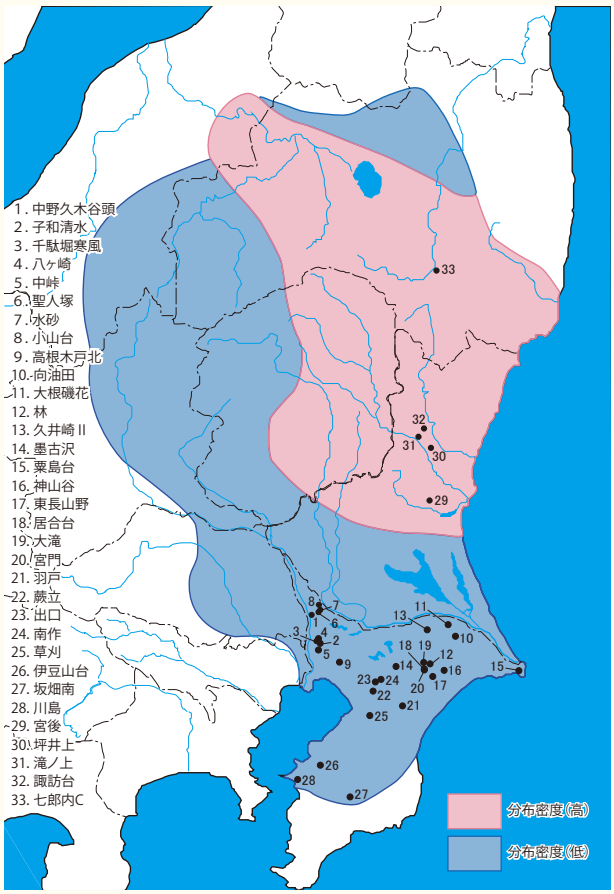


図100　七郎内Ⅱ群土器　分布図

この図によれば、宮後タイプを含む七郎内Ⅱ群土器は新潟県魚沼地方や阿賀北地方が一部含まれますが、福島県南半から栃木県・茨城県北半に主要な分布圏があることがわかります。塚本によれば、宮後タイプは茨城県北部の海岸沿いの地域を中心に分布するようです。千葉県の七郎内Ⅱ群土器を出土する遺跡は現在28遺跡で、このうち宮後タイプを出土する遺跡は4遺跡です。このように、大木7b式系の異系統土器を出土する千葉県の遺跡は近年、増加の傾向はあるものの散漫な分布で、県内での分布の粗密を捉えるまでには至っていません。

まとめ　小山台遺跡の事例は、今まで扱われることが少なかった千葉県における中期前葉から中葉期の大木式分布圏との交流を示す一定の資料であり、阿玉台式、勝坂式とともに地域間交流を調べる足掛かりになったといえます。中でも異系統土器の共伴と、異系統文様の同一個体共存となるキメラ土器の存在が注目されます。

佐藤達夫は、同一年代、同一地域に異系統土器が共存する背景には、人間そのものの移動と異系統文様の伝習の両者が絡み合ったものと捉えるとともに、同一個体に異系統の土器文様が共存する事例にも注目し、一個の土器は一人の人間が製作することを前提として異系統文様の伝習が行われたと考えました(佐藤達夫1974)。この視点により土器分析が精緻にされた場合、それに伴ったと考える遺構・遺物を総合的に分析できれば、地域間交流の実態や各文化の広がりが、より良く描けると思われます。

千葉県の中期中葉から後葉期では下総台地を中心に、広場の周りを住居と貯蔵穴が取り囲んで配置する、環状構造の拠点集落が各所に作られました。この拠点集落を形成したのは在地の下総台地の人たちだけではなく、勝坂式分布圏の人たちが大きく関わっていることが、今までの研究からわかっています。大木式系分布圏の人々の関わりも前葉期から中葉期までとは比較にならないほど、土器などの遺物、貯蔵穴などの遺構の情報からわかっています。縄文時代の千葉県は周囲を河川と内海に囲まれた地形で、貝塚をはじめ遺跡がとても多く、特色のある文化を育んだ地域といえます。この文化は接触地域との交流によって受け入れ、咀嚼されたものが含まれるでしょう。そのような地域間の交流の様子を解き明かすことも考古学研究の醍醐味といえます。

展示資料一覧

	号 番	資料名	遺跡名	県市町村	所蔵者
第1章 縄文	1	深鉢(井草式)	取香和田戸遺跡	成田市	千葉県教育委員会
	2～7	深鉢(花輪台式)	金堀遺跡	富里市	富里市教育委員会
	8～15	深鉢(金堀式)			
	16	深鉢(関山Ⅱ式)	寺山貝塚	市川市	市川市教育委員会
	17・18	深鉢(関山Ⅱ式)	幸田貝塚	松戸市	松戸市教育委員会
	19	深鉢(黒浜式)	駒形遺跡	柏市	千葉県教育委員会
縄文地と無文地	20	浅鉢(諸磯ｂ式)	三輪野山宮前遺跡	流山市	流山市教育委員会
	21	深鉢(称名寺Ⅰ式)	餅ヶ崎遺跡	千葉市	千葉市教育委員会
	22	深鉢(加曽利Ｂ２式)	三直貝塚	君津市	千葉県教育委員会
	23	深鉢(加曽利Ｂ２式)	姥山貝塚	市川市	明治大学
	24	深鉢(曽谷式)	吉見台遺跡Ａ地点	佐倉市	佐倉市教育委員会
	25	深鉢(安行２式)	宮内井戸作遺跡		
	26	深鉢(安行３ａ式)	井野長割遺跡		
	27	浅鉢(前浦式)	西広貝塚	市原市	市原市教育委員会
隆起線文＋沈線文・結節沈線文	28	深鉢(阿玉台Ⅰｂ式)	笹原遺跡	柏市	柏市教育委員会
	29	深鉢(勝坂Ⅰ式)	鳴神山Ａ貝塚	市川市	市川市教育委員会
	30・31	深鉢(勝坂Ⅴ式)	大松遺跡	柏市	千葉県教育委員会
	32	深鉢(中峠類型)	東長山野遺跡	横芝光町	横芝光町教育委員会
	33	深鉢(加曽利ＥⅠ式)	向台貝塚	市川市	市川市教育委員会
	34	深鉢(加曽利ＥⅠ式)	粟島台遺跡	銚子市	銚子市教育委員会
	35	深鉢(加曽利ＥⅠ式)	東長山野遺跡	横芝光町	横芝光町教育委員会
	36	深鉢(曽利Ⅲ式重弧文)	伊豆山台遺跡	木更津市	木更津市教育委員会
沈線文・結節沈線文	37	深鉢(三戸式)	香山新田中横堀遺跡	芝山町	芝山町教育委員会
	38	深鉢(鵜ガ島台式)	桜井平遺跡	旭市	旭市教育委員会
	39	深鉢(諸磯ｂ式)	上台貝塚	市川市	市川市教育委員会
	40	深鉢(十三菩提式)	文六第２遺跡	千葉市	千葉市教育委員会
	41	深鉢(五領ヶ台Ⅰ式)	上谷遺跡	八千代市	八千代市教育委員会
	42	深鉢(堀之内１式)	吉見台遺跡Ａ地点	佐倉市	佐倉市教育委員会
	43	鉢(加曽利Ｂ１式)	姥山貝塚	市川市	明治大学
貝殻文	44	深鉢(茅山下層式)	桜井平遺跡	旭市	旭市教育委員会
	45	深鉢(浮島Ⅲ式)	小山台遺跡	柏市	千葉県教育委員会
	46	鉢(興津式)	上台貝塚	市川市	早稲田大学
造形(器形)	47	浅鉢(諸磯ａ式)	三輪野山宮前遺跡	流山市	流山市教育委員会
	48～50	浅鉢(諸磯ｂ式)			
	51	浅鉢(浮島Ⅰ式)			
	52	鉢(諸磯式)			
	53	浅鉢(加曽利Ｂ２式)	井野長割遺跡	佐倉市	佐倉市教育委員会
	54	浅鉢(安行３ａ式)	三直貝塚	君津市	千葉県教育委員会
	55	台付鉢(関山Ⅱ式)	駒形遺跡	柏市	
	56	台付鉢(勝坂Ⅳ式)	馬乗場遺跡	松戸市	松戸市教育委員会
	57	有孔鍔付土器(阿玉台Ⅱ式)	大松遺跡	柏市	千葉県教育委員会
	58	片口付深鉢(関山Ⅱ式)	稲荷前遺跡	野田市	野田市郷土博物館
	59	注口付浅鉢(阿玉台Ⅱ式)	ヲサル山遺跡	八千代市	八千代市教育委員会
	60	有孔鍔付注口土器(加曽利ＥⅣ式)	江原台遺跡	佐倉市	佐倉市教育委員会
	61	有孔鍔付注口土器(加曽利ＥⅣ式)	キサキ遺跡	成田市	成田市教育委員会
	62	注口土器(加曽利Ｂ１式)	宮内井戸作遺跡	佐倉市	佐倉市教育委員会
	63	注口土器(安行２式～３ａ式)			
	64	壺(加曽利Ｂ１式)			
	65	異形台付土器(加曽利Ｂ３式)			
	66・67	異形台付土器(安行２式)	中沢貝塚	鎌ヶ谷市	鎌ケ谷市教育委員会
	68・69	異形台付土器(安行２式)	三直貝塚	君津市	千葉県教育委員会
	70	香炉形土器(加曽利Ｂ式)	井野長割遺跡	佐倉市	佐倉市教育委員会
	71	吊手土器(曽谷式)	西広貝塚	市原市	市原市教育委員会
	72	手燭形土器(安行３ａ式)	能満上小貝塚		
	73	手燭形土器(安行３ａ式)	吉見台遺跡	佐倉市	佐倉市教育委員会
造形(意匠)	74	顔面突起(十三菩提式)	赤作遺跡	八千代市	千葉県教育委員会
	75	顔面突起(阿玉台式)	中野久木谷頭遺跡	流山市	流山市教育委員会
	76	顔面把手(勝坂式)	草刈貝塚	市原市	市原市教育委員会
	77	顔面把手(勝坂式)	川代遺跡	茂原市	茂原市教育委員会
	78	顔面付土器(加曽利Ｂ2式)	中沢貝塚	鎌ヶ谷市	鎌ケ谷市教育委員会
	79	顔面付土器(安行３ｂ式)	下ヶ戸貝塚	我孫子市	我孫子市教育委員会

	号 番	資料名	遺跡名	県市町村	所蔵者
造形(意匠)	80	人体文付土器(勝坂Ⅰ式)	中山新田Ⅰ遺跡	柏市	千葉県教育委員会
	81	人体文付土器(勝坂Ⅲ式)	草刈貝塚	市原市	
	82	人体文付土器(勝坂Ⅴ式)	小山台遺跡	柏市	
	83～85	獣面突起(諸磯ｂ式)	木戸先遺跡	四街道市	四街道市教育委員会
	86	獣面突起(諸磯ｂ式)	三輪野山宮前遺跡	流山市	流山市教育委員会
	87～91	獣面突起(諸磯ｂ式)	草刈遺跡	市原市	千葉県教育委員会
	92	獣面突起(諸磯ｂ式)	太田法師遺跡	千葉市	
	93	獣面突起(諸磯ｂ式)	神山谷遺跡	横芝光町	横芝光町教育委員会
	94	鳥頭形突起(加曽利ＥⅣ式)	柏野遺跡	市原市	個人
	95	鳥頭形突起(加曽利ＥⅣ式)	宮内井戸作遺跡	佐倉市	佐倉市教育委員会
	96	鳥頭形突起(加曽利ＥⅣ式)	宮台遺跡	横芝光町	個人
	97	鳥頭形突起(加曽利ＥⅣ式)	多田遺跡	香取市	千葉県教育委員会
	98	鳥頭形突起付土器(加曽利ＥⅣ式)	馬込遺跡	印西市	印西市教育委員会
	99	動物意匠文付土器(勝坂Ⅲ式)	ユルギ松遺跡	船橋市	船橋市教育委員会
彩色	100	彩色鉢(諸磯ｂ式)	道免き谷津遺跡	市川市	千葉県教育委員会
	101～103	彩色土器(中期中葉～後葉)	粟島台遺跡	銚子市	銚子市教育委員会
	104	彩色台付鉢(中峠類型)	東長山野遺跡	横芝光町	横芝光町教育委員会
	105	彩色土器(加曽利Ｂ２式)	道免き谷津遺跡	市川市	千葉県教育委員会
	106	彩色土器(荒海１式)	武士遺跡	市原市	
	107	彩色有孔漆容器(中期)	粟島台遺跡	銚子市	銚子市教育委員会
	108	漆容器(加曽利Ｅ Ⅰ式)	吉見稲荷山遺跡	佐倉市	佐倉市教育委員会
	109	ベンガラ入り壺(荒海１式)	御山遺跡	四街道市	千葉県教育委員会
第2章 製作	110～147	短冊状土器破片(加曽利Ｅ式)	加曽利貝塚	千葉市	千葉市教育委員会
	148・149	底部板(加曽利Ｅ式)			
	150	底部板立上げ部位(加曽利Ｅ式)			
	151	底部板立上げ部位模型			
	152	底部板に土器片を再利用した土器(加曽利Ｅ式)			
	153	刻み入れ技法のある底部(堀之内１式)	境貝塚	芝山町	個人
	154	薄造りの土器(安行３ｂ式)	桜宮遺跡	多古町	個人
	155	歪んだ注口土器(加曽利Ｂ１式)	宮内井戸作遺跡	佐倉市	佐倉市教育委員会
	156～164	焼成粘土塊(浮島式)	和良比遺跡	四街道市	四街道市教育委員会
	165～169	焼成粘土塊(加曽利Ｅ式)	飯積原山遺跡	酒々井町	千葉県教育委員会
	170・171	焼成粘土塊(加曽利ＥⅢ～ＥⅣ式)	多田遺跡	香取市	
	172～176	焼成粘土塊(後期～晩期)	三直貝塚	君津市	君津市教育委員会
	177	焼成粘土塊(後期)	桜宮遺跡	多古町	個人
	178	台形土器(中期中葉～後葉)	中野久木谷頭遺跡	流山市	流山市教育委員会
	179	台形土器(加曽利ＥⅡ式)	上大堀遺跡	市原市	市原市教育委員会
	180	台形土器(加曽利ＥⅢ式)	林台遺跡	柏市	柏市教育委員会
使用	181	深鉢(加曽利Ｂ式)	高谷川低地遺跡	横芝光町	千葉県教育振興財団 保管
	182	深鉢(安行３ａ式)			
	183	深鉢(安行２式～３ａ式)			
	184	深鉢(加曽利Ｂ式)			
	185	深鉢(安行式)			
	186	深鉢(加曽利Ｂ式)	西根遺跡	印西市	千葉県教育委員会
	187	広口壺(加曽利Ｂ２式)			
修復	188	補修孔のある深鉢(早期条痕文系)	小山台遺跡	柏市	
	189	補修孔のある浅鉢(諸磯ａ式)	道免き谷津遺跡	市川市	
	190	補修孔のある浅鉢(諸磯ａ式)	木戸先遺跡	四街道市	四街道市教育委員会
	191	補修孔のある浅鉢(浮島Ⅰ式)			
	192	補修孔のある深鉢(堀之内１式)	武士遺跡	市原市	千葉県教育委員会
	193	補修孔のある粗製深鉢(加曽利Ｂ式)	宮内井戸作遺跡	佐倉市	佐倉市教育委員会
転用	194～217	土器片錘(加曽利ＥⅡ式)	吉見稲荷山遺跡		
	218～222	土器片錘(加曽利ＥⅢ式)	墨古沢遺跡	酒々井町	酒々井町教育委員会
	223	炉体に用いられた深鉢(中峠類型)	草刈貝塚	市原市	千葉県教育委員会
	224	炉体に用いられた深鉢(加曽利ＥⅡ式)	飯積原山遺跡	酒々井町	
	225	炉体に用いられた深鉢(加曽利ＥⅡ式連弧文)			
	226	甕被り葬に用いられた深鉢(加曽利ＥⅡ式)	草刈貝塚	市原市	
廃棄	227～232	深鉢(加曽利Ｅ Ⅰ式)	養安寺遺跡	東金市 大網白里市	
	233	深鉢(加曽利ＥⅢ式)			
	234	注口土器(堀之内１式)			

	号 番	資料名	遺跡名	県市町村	所蔵者
第3章	235～238	深鉢（二ツ木式）	二ツ木向台貝塚	松戸市	南山大学
	239	深鉢（二ツ木式）			松戸市教育委員会
	240	深鉢（阿玉台Ⅰb式）	阿玉台貝塚	香取市	早稲田大学
	241	深鉢（阿玉台Ⅰb式）	木之内明神貝塚		香取市教育委員会
	242	深鉢（阿玉台Ⅱ式）	向油田貝塚		早稲田大学
	243	深鉢（加曽利EⅠ式）	加曽利貝塚	千葉市	明治大学
	244	深鉢（加曽利EⅡ式）			千葉市教育委員会
	245	深鉢（加曽利EⅢ式）			
	246	深鉢（堀之内１式）	堀之内貝塚	市川市	東京大学
	247	深鉢（堀之内１式）			市川市教育委員会
	248	深鉢（堀之内２式）			
	249	注口土器（堀之内２式）			東京大学
	250	注口土器（堀之内２式）			市川市教育委員会
	251	深鉢（加曽利Ｂ１式）	加曽利貝塚	千葉市	千葉市教育委員会
	252	鉢（加曽利Ｂ１式）			
	253・255	深鉢（加曽利Ｂ２式）			
	254	浅鉢（加曽利Ｂ２式）			
	256	深鉢（加曽利Ｂ３式）			
	257	深鉢（曽谷式）	曽谷貝塚	市川市	市川市教育委員会
	258	浅鉢（曽谷式）			
	259	異形台付土器（曽谷式）			
	260	鉢（荒海２式）	荒海貝塚	成田市	早稲田大学
	261	鉢（荒海３式）			
	262	甕（荒海３式）			
	263	甕（荒海式）			
第4章	264	深鉢（野島式）	飛ノ台貝塚	船橋市	船橋市教育委員会
	265	深鉢（野島式）	鳥喰東遺跡	千葉市	千葉市教育委員会
	266	深鉢（鵜ガ島台式）	谷向貝塚	南房総市	市川市教育委員会
	267	深鉢（鵜ガ島台式）	桜井平遺跡	旭市	旭市教育委員会
	268	深鉢（茅山下層式）	飛ノ台貝塚	船橋市	船橋市教育委員会
	269	深鉢（茅山上層式）	綱原遺跡	香取市	千葉県教育委員会
	270	深鉢（阿玉台Ⅰa式）	房谷戸遺跡	群馬県渋川市	渋川市教育委員会
	271	深鉢（阿玉台Ⅰb式）	根木内遺跡	松戸市	松戸市教育委員会
	272	深鉢（阿玉台Ⅰb式）	後貝塚	船橋市	日本大学
	273	深鉢（阿玉台Ⅱ式）	子和清水貝塚	松戸市	松戸市教育委員会
	274	深鉢（阿玉台Ⅲ式）	南作遺跡	四街道市	四街道市教育委員会
	275	深鉢（阿玉台Ⅳ式）	聖人塚遺跡	柏市	千葉県教育委員会
第5章	276	深鉢（勝坂Ⅱ式・新崎Ⅱ式）	練木遺跡	君津市	君津市教育委員会
	277	深鉢（火炎系）	有吉北貝塚	千葉市	千葉県教育委員会
	278	深鉢（曽利Ⅲ式重弧文）	伊豆山台遺跡	木更津市	木更津市教育委員会
	279	深鉢（曽利Ⅲ式斜行文）	粟島台遺跡	銚子市	銚子市教育委員会
	280	鉢（阿高式）	西広貝塚	市原市	市原市教育委員会
	281・282	鉢（橿原式文様）	山野貝塚	袖ケ浦市	袖ケ浦市教育委員会
	283	注口土器（元住吉山Ⅰ式）	井野長割遺跡	佐倉市	佐倉市教育委員会
	284	壺（大洞BC式）	下ヶ戸貝塚	我孫子市	我孫子市教育委員会
	285	深鉢（七郎内Ⅱ群）	坪井上遺跡	茨城県常陸大宮市	常陸大宮市教育委員会
	286・287	深鉢（阿玉台Ⅲ式）	小山台遺跡	柏市	千葉県教育委員会
	288	深鉢（中峠類型）			
	289	深鉢（阿玉台式・勝坂式・七郎内Ⅱ群）			
	290	深鉢（勝坂式・大木式系）			
	291	深鉢（七郎内Ⅱ群）			
	292	浅鉢（七郎内Ⅱ群）			
	293	浅鉢（七郎内Ⅱ群）	大滝遺跡	芝山町	芝山町教育委員会
	294	深鉢（七郎内Ⅱ群）	滝ノ上遺跡	茨城県常陸大宮市	常陸大宮市教育委員会
	295	深鉢（阿玉台Ⅲ式）			
	296	浅鉢（七郎内Ⅱ群）			
	297	深鉢（七郎内Ⅱ群）	墨古沢遺跡	酒々井町	千葉県教育委員会
	298	深鉢（七郎内Ⅱ群）	諏訪台遺跡	茨城県常陸大宮市	常陸大宮市教育委員会
	299	深鉢（七郎内Ⅱ群）	粟島台遺跡	銚子市	銚子市教育委員会
	300	深鉢（宮後タイプ）	大根磯花遺跡	香取市	香取市教育委員会
	301	深鉢（宮後タイプ）	宮後遺跡	茨城県茨城町	茨城町教育委員会
	302	深鉢（阿玉台Ⅲ式）			
	303	深鉢（阿玉台Ⅳ式）			

図・写真出典・提供

第1章

図1 東京大学総合研究博物館提供
Edward S. Morse 1879 "SHELL MOUNDS OF OMORI"（矢田部良吉訳『大森介墟古物編』）PLATE Ⅱ
図2 上守秀明作成
図3 財団撮影　君津市踊ヶ作遺跡（千葉県教育委員会所蔵）
図4 財団撮影　野田市稲荷前遺跡（野田市郷土博物館所蔵）
図5 財団撮影　柏市駒形遺跡（千葉県教育委員会所蔵）
図6 財団撮影　市原市西広貝塚（市原市教育委員会所蔵）
図7・8 上守秀明作成
図9 財団撮影　千葉市文六第２遺跡（千葉市埋蔵文化財調査センター所蔵）
図10 市川市教育委員会提供（小川忠博氏撮影）市川市鳴神山Ａ貝塚
図11 千葉県教育委員会提供　柏市大松遺跡
図12 市川市教育委員会提供（小川忠博氏撮影）市川市向台貝塚
図13～18 上守秀明作成
図19 財団撮影　流山市三輪野山宮前遺跡（流山市教育委員会所蔵）
図20 財団撮影　松戸市馬乗場遺跡（松戸市立博物館所蔵）
図21 財団撮影　柏市大松遺跡（千葉県教育委員会所蔵）
図22 財団撮影　野田市稲荷前遺跡（野田市郷土博物館所蔵）
図23 財団撮影　八千代市ヲサル山遺跡（八千代市立博物館所蔵）
図24 財団撮影　佐倉市江原台遺跡（佐倉市教育委員会所蔵）
図25 財団撮影　佐倉市宮内井戸作遺跡（佐倉市教育委員会所蔵）
図26 財団撮影　鎌ケ谷市中沢貝塚（鎌ケ谷市教育委員会所蔵）
図27 財団撮影　君津市三直貝塚（千葉県教育委員会所蔵）
図28 財団撮影　佐倉市井野長割遺跡（佐倉市教育委員会所蔵）
図29 財団撮影　市原市西広貝塚（市原市教育委員会所蔵）
図30 財団撮影　市原市能満上小貝塚（市原市教育委員会所蔵）
図31 財団撮影　佐倉市吉見台遺跡（佐倉市教育委員会所蔵）
図32 財団撮影　八千代市赤作遺跡（千葉県教育委員会所蔵）
図33 財団撮影　流山市中野久木谷頭遺跡（流山市教育委員会所蔵）
図34 財団撮影　市原市草刈貝塚（千葉県教育委員会所蔵）
図35 財団撮影　茂原市市川代遺跡（千葉県教育委員会所蔵）
図36 財団撮影　鎌ケ谷市中沢貝塚（鎌ケ谷市教育委員会所蔵）
図37 財団撮影　我孫子市下ヶ戸貝塚（我孫子市教育委員会所蔵）
図38 財団撮影　柏市中山新田Ⅰ遺跡（千葉県教育委員会所蔵）
図39 財団撮影　市原市草刈貝塚（千葉県教育委員会所蔵）
図40 財団撮影　四街道市木戸先遺跡（四街道市教育委員会所蔵）
図41 財団撮影　流山市三輪野山宮前遺跡（流山市教育委員会所蔵）
図42 財団撮影　市原市柏野遺跡（個人蔵）
図43 財団撮影　印西市馬込遺跡（印西市教育委員会所蔵）
図44 財団撮影　船橋市ユルギ松遺跡（船橋市教育委員会所蔵）
図45 千葉県教育委員会提供　(公財)千葉県教育振興財団『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書４－市川市道免き谷津遺跡第１地点（４）－』千葉県教育振興財団調査報告第703集巻頭図版１上段
図46 財団撮影　横芝光町東長山野遺跡（横芝光町教育委員会所蔵）
図47 財団撮影　銚子市粟島台遺跡（銚子市教育委員会所蔵）
図48 千葉県教育委員会提供　(公財)千葉県教育振興財団『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書15－市川市道免き谷津遺跡第１地点（12）・（13）、第４地点、第５地点、新山遺跡第23地点、第24地点－』千葉県教育振興財団調査報告第781集巻頭図版１下段右

第2章

図49 戸村正己氏提供 戸村正己2020「「縄文土器の製作技法を探る」（１）－成形－　－「短冊状土器破片」が示す加曽利Ｅ式土器の成形について－」『貝塚博物館紀要』第46号 千葉市立加曽利貝塚博物館 写真７

図50 戸村正己氏提供 戸村正己2020「「縄文土器の製作技法を探る」(1)－成形－ －「短冊状土器破片」が示す加曽利Ｅ式土器の成形について－」『貝塚博物館紀要』第46号 千葉市立加曽利貝塚博物館 第５図
図51 戸村正己氏提供 戸村正己2020「「縄文土器の製作技法を探る」(1)－成形－ －「短冊状土器破片」が示す加曽利Ｅ式土器の成形について－」『貝塚博物館紀要』第46号 千葉市立加曽利貝塚博物館 第９図
図52 上・下 山梨県立考古博物館提供 山梨県教育委員会2004『酒呑場遺跡(第１～３次)－酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書－』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第216集 図版5 4段目右・図版6 1段目左
図53 (公財)東京都埋蔵文化財センター提供 東京都埋蔵文化財センター1998『多摩ニュータウン遺跡－№245・341遺跡－Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター調査報告第57集 №245遺跡図版32・70
図54 (公財)東京都埋蔵文化財センター1998『多摩ニュータウン遺跡－№245・341遺跡－Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター調査報告第57集 第218図
図54 (公財)東京都埋蔵文化財センター2000『多摩ニュータウン遺跡－№247・248遺跡－(本文編)』東京都埋蔵文化財センター調査報告第80集 第229図
図55～57 財団撮影・作成 横芝光町高谷川低地遺跡((公財)千葉県教育振興財団保管)
図58 財団撮影 印西市西根遺跡(千葉県教育委員会所蔵)
図59 財団撮影 柏市小山台遺跡(千葉県教育委員会所蔵)
図60 東村山市教育委員会提供 千葉敏郎2009『縄文の漆の里・下宅部遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」062 図46下
図61・62 財団撮影 酒々井町墨古沢遺跡(酒々井町教育委員会所蔵)
図63 千葉県教育委員会提供 (財)千葉県文化財センター1986「千原台ニュータウンⅢ　草刈遺跡(B区)」千葉県文化財センター調査報告第117集図版二一　遺構　3
図64 千葉県教育委員会提供 (公財)千葉県教育振興財団2015『酒々井町飯積原山遺跡４－酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書５－』千葉県教育振興財団調査報告第742集　図版11(４段目右)
図65 千葉県教育委員会提供 (財)千葉県文化財センター1986「千原台ニュータウンⅢ　草刈遺跡(B区)」千葉県文化財センター調査報告第117集図版二四　遺構　2
図66 千葉県教育振興財団2017『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書32－東金市養安寺遺跡・大網白里市養安寺遺跡－第１分冊』千葉県教育振興財団調査報告第758集第104図を改変
図67 千葉県教育振興財団2017『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書32－東金市養安寺遺跡・大網白里市養安寺遺跡－第１分冊』千葉県教育振興財団調査報告第758集第336図を改変

第３章

図68・69 財団作成
図70 千葉県1998『千葉県史編さん資料　松戸市二ツ木向台貝塚資料調査報告書』第３図15を改変
図71 一般社団法人日本人類学会承諾 下村三四吉・八木奘三郎1894「堀内貝塚發見の石角貝骨器の二三に就て」『東京人類學會雑誌』第九巻 第九七號　巻末、下総國阿玉臺貝塚ヨリ採集セル土器
図72 東京大学総合研究博物館提供 千葉県2004『千葉県の歴史 資料編 考古４(遺跡・遺構・遺物)』県史シリーズ12　13頁12
図73 千葉市立加曽利貝塚博物館提供 千葉市立加曽利貝塚博物館2019『令和元年度企画展 あれもＥこれもＥ－加曽利Ｅ式土器(印旛地域編)－』リーフレット掲載図
図74 一般社団法人日本人類学会承諾 大野雲外1904「堀内貝塚發見の石角貝骨器の二三に就て」『東京人類學會雑誌』第二十巻 第二百二十四號 一一六頁、堀内貝塚發見品陳列
図75 谷　大作氏・市立市川考古博物館承諾 市立市川考古博物館1992『堀之内貝塚資料図譜』市立市川考古博物館研究調査報告第５冊　第５図３・第20図
図76 千葉県2004『千葉県の歴史 資料編 考古４(遺跡・遺構・遺物)』県史シリーズ12　図18- ５～７
図77 奈良国立文化財研究所1996『曽谷貝塚資料他 山内清男考古資料７』奈良国立文化財研究所史料　第43冊　Fig.13、22・23頁掲載図
図78 国立歴史民俗博物館2021『[特定研究]日本歴史における地域性の総合的研究－古代東国の地域的特性　千葉県荒海貝塚の発掘調査』図227-14・図230-56・72・図235-160

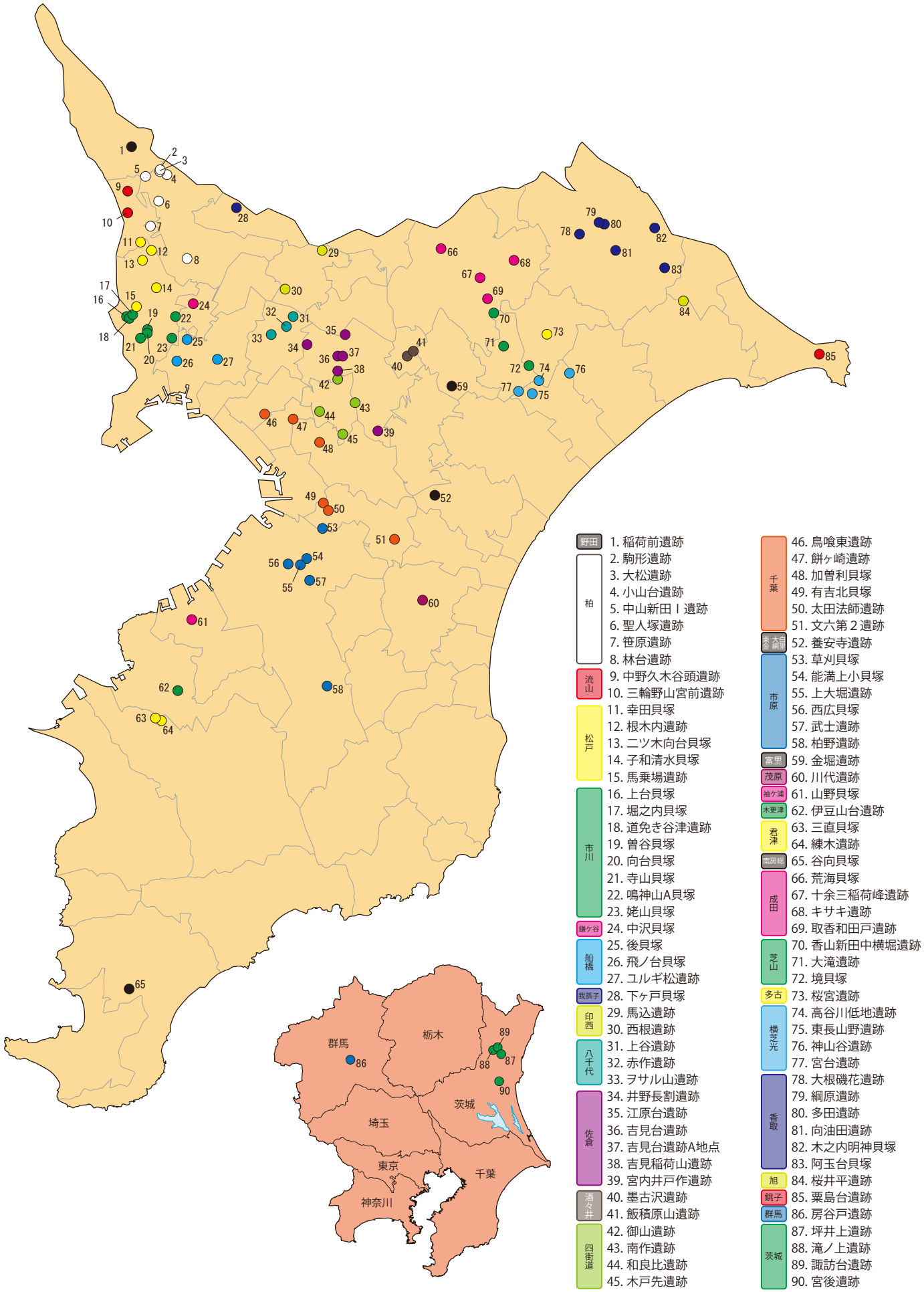
第４章

図79 財団作成
図80－１ 船橋市飛ノ台史跡公園博物館2004『飛ノ台史跡公園博物館紀要』創刊号　第18図１
図80－２ 千葉県2000『千葉県の歴史 資料編 考古１(旧石器・縄文時代)』県史シリーズ９　291頁図２－９
図80－３ 領塚正浩1989「故野口義麿氏寄贈の鵜ガ島台式土器」『平成元年度市立市川考古博物館年報－第18号－』第１図
図80－４ (財)千葉県文化財センター1998『千潟工業団地埋蔵文化財調査報告書－千潟町諏訪山遺跡・十二殿遺跡・茄子台遺跡・桜井平遺跡－本文編』千葉県文化財センター調査報告第321集 第169図９
図80－５ 船橋市飛ノ台史跡公園博物館2004『飛ノ台史跡公園博物館紀要』創刊号 第79図12

図80－６ (財)千葉県文化財センター1991『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅵ(佐原地区)大稲塚遺跡・棒木台遺跡・毛内遺跡・綱原遺跡・綱原屋敷跡遺跡・多田綱原遺跡・出口遺跡』千葉県文化財センター調査報告第191集　第93図１
図81 財団作成
図82－１ 北橘村教育委員会1995『北橘村村内遺跡Ⅲ－平成５・６年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』北橘村埋蔵文化財発掘調査報告書第16集　第20図１
図82－２ 松戸市教育委員会1997『根木内遺跡 第４地点発掘調査報告書』第91図１
図82－３ 寺内隆夫2009「戦時中に行われた後貝塚の発掘調査－日本大学文理学部所蔵千葉県船橋市後貝塚出土資料について(中間報告)－」『竹石健二先生・澤田大多郎先生古希記念論文集』第８図８
図82－４ 群馬県教育委員会1989『房谷戸遺跡Ⅰ－関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第27集－』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第95集　162図８
図82－５ 松戸市教育委員会1978『子和清水貝塚 遺物図版編１』松戸市文化財調査報告 第８集　遺物図版52- １
図82－６ (財)印旛郡市文化財センター2007『千葉県四街道市南作遺跡(第１分冊)』(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第241集　第111図１
図82－７ (財)千葉県文化財センター1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－元割・聖人塚・中山新田Ⅰ－』千葉県文化財センター調査報告第112集第181図４

第５章

図83 大村　裕2002「二つの「顔」を持った土器－千葉県君津市練木遺跡出土中期縄文土器の研究－」『土曜考古』第26号 土曜考古学研究会　第２図
図84 (財)千葉県文化財センター1998『千葉東南部ニュータウン19－千葉市有吉北貝塚１(旧石器・縄文時代)－第１分冊(本文)』千葉県文化財センター調査報告第324集第135図１
図85－１ 木更津市教育委員会2000『木更津市文化財調査集報４－伊豆山台遺跡・金鈴塚古墳－』第29図174
図85－２ 銚子市教育委員会2000『粟島台遺跡－銚子市粟島台遺跡1973・75の発掘調査報告書－』第122図１
図86 市原市教育委員会提供　市原市西広貝塚
図87 袖ケ浦市教育委員会2016『千葉県袖ケ浦市山野貝塚総括報告書－房総半島に現存する最南部の縄文時代後・晩期の大型貝塚－』第36図195・第49図25
図88 財団撮影　佐倉市井野長割遺跡(佐倉市教育委員会所蔵)
図89 財団撮影　茨城県常陸大宮市坪井上遺跡(常陸大宮市教育委員会所蔵)
図90 (財)茨城県教育財団2002『宮後遺跡１　やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　下巻』茨城県教育財団文化財調査報告第188集　第302図５
図91 (公財)千葉県教育振興財団2019『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15－柏市小山台遺跡B区－縄文時代以降編第２分冊』千葉県教育振興財団調査報告第775集第452図８-585・８-586・８-587・８-588・第453図８-589
西川博孝2017「柏市小山台遺跡に見る阿玉台Ⅲ式期の東北的土器様相」『研究連絡誌』第78号(公財)千葉県教育振興財団　第2図
図92 (公財)千葉県教育振興財団2019『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15－柏市小山台遺跡B区－縄文時代以降編第１分冊』千葉県教育振興財団調査報告第775集第160図４-44
図93 常陸大宮市教育委員会2014『滝ノ上遺跡Ⅰ　畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査３』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第19集　第104図３
図94 (公財)千葉県教育振興財団2019『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15－柏市小山台遺跡B区－縄文時代以降編第２分冊』千葉県教育振興財団調査報告第775集第417図８-376
図95 芝山町教育委員会2019『大滝遺跡(谷向1425地点)－競輪場外車券発売施設拡張事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』芝山町埋蔵文化財調査報告書第６集　第24図６
図96 常陸大宮市教育委員会2016『滝ノ上遺跡Ⅳ　畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査６』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第30集　第118図２
図97左 (財)千葉県教育振興財団2007『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書４－酒々井町墨古沢遺跡－旧石器・縄文時代編 第１分冊(本文)』千葉県教育振興財団調査報告第570集第78図158- １
図97右 上守秀明2017「香取市大根磯花(上谷津)遺跡出土の中期前葉の異系統土器」『研究連絡誌』第78号 (公財)千葉県教育振興財団　第６図１b
図98 財団撮影　常陸大宮市諏訪台遺跡(常陸大宮市教育委員会所蔵)
図99 上守秀明2017「香取市大根磯花(上谷津)遺跡出土の中期前葉の異系統土器」『研究連絡誌』第78号 (公財)千葉県教育振興財団　第５図左
図100 塚本師也氏提供の原図(非公表)を改変
各章帯 船橋市教育委員会2001「飛ノ台貝塚第1・2次発掘調査報告書(写真図版編)　写真図版1飛ノ台貝塚出土土器展開写真(1)　7炉穴A出土土器



野田
1. 稲荷前遺跡

柏
2. 駒形遺跡
3. 大松遺跡
4. 小山台遺跡
5. 中山新田Ⅰ遺跡
6. 聖人塚遺跡
7. 笹原遺跡
8. 林台遺跡

流山
9. 中野久木谷頭遺跡
10. 三輪野山宮前遺跡

松戸
11. 幸田貝塚
12. 根木内遺跡
13. 二ツ木向台貝塚
14. 子和清水貝塚
15. 馬乗場遺跡

市川
16. 上台貝塚
17. 堀之内貝塚
18. 道免き谷津遺跡
19. 曽谷貝塚
20. 向台貝塚
21. 寺山貝塚
22. 鳴神山A貝塚
23. 姥山貝塚

鎌ケ谷
24. 中沢貝塚

船橋
25. 後貝塚
26. 飛ノ台貝塚
27. ユルギ松遺跡

我孫子
28. 下ヶ戸貝塚

印西
29. 馬込遺跡
30. 西根遺跡

八千代
31. 上谷遺跡
32. 赤作遺跡
33. ヲサル山遺跡

佐倉
34. 井野長割遺跡
35. 江原台遺跡
36. 吉見台遺跡
37. 吉見台遺跡A地点
38. 吉見稲荷山遺跡
39. 宮内井戸作遺跡

酒々井
40. 墨古沢遺跡
41. 飯積原山遺跡

四街道
42. 御山遺跡
43. 南作遺跡
44. 和良比遺跡
45. 木戸先遺跡

千葉
46. 鳥喰東遺跡
47. 餅ヶ崎遺跡
48. 加曽利貝塚
49. 有吉北貝塚
50. 太田法師遺跡
51. 文六第２遺跡

大網白里
52. 養安寺遺跡

市原
53. 草刈貝塚
54. 能満上小貝塚
55. 上大堀遺跡
56. 西広貝塚
57. 武士遺跡
58. 柏野遺跡

富里
59. 金堀遺跡

茂原
60. 川代遺跡

袖ケ浦
61. 山野貝塚

木更津
62. 伊豆山台遺跡

君津
63. 三直貝塚
64. 練木遺跡

南房総
65. 谷向貝塚

成田
66. 荒海貝塚
67. 十余三稲荷峰遺跡
68. キサキ遺跡
69. 取香和田戸遺跡
70. 香山新田中横堀遺跡

芝山
71. 大滝遺跡
72. 境貝塚

多古
73. 桜宮遺跡

横芝光
74. 高谷川低地遺跡
75. 東長山野遺跡
76. 神山谷遺跡
77. 宮台遺跡

香取
78. 大根磯花遺跡
79. 綱原遺跡
80. 多田遺跡
81. 向油田遺跡
82. 木之内明神貝塚
83. 阿玉台貝塚

旭
84. 桜井平遺跡

銚子
85. 粟島台遺跡

群馬
86. 房谷戸遺跡

茨城
87. 坪井上遺跡
88. 滝ノ上遺跡
89. 諏訪台遺跡
90. 宮後遺跡

展示遺跡位置図

●発　行　日：令和３年７月24日
●編集・発行：公益財団法人千葉県教育振興財団　〒284-0003　四街道市鹿渡809-2
●印　　刷：株式会社エリート情報社